



リアム・ケー物語 (全45ページ)

リアム・ケーはインドから伝わったラーマヤナがカンボジアの文化、習慣に添うようにアレンジされたものです・・・という「いいや、インドよりもカンボジアの方が先だ。その証拠にインドにはアンコール・ワットがあるか!？」と憤怒するクメール人もいますが、ええ、そのくらいクメール人、特にシエムリアップに住むクメール人には身近な物語です。アンコール・ワットの回廊にランカー島の戦闘シーンなどが彫られているのは有名ですが、古典舞踊や、古典劇の題材にも使われ、もちろんスパエク・トムで演じられるのもリアム・ケーです。この他、今では行われていませんが、昔は語りだけのリアム・ケーというものがあったのです。祭のときなどに、語り部がひとりで夜ごと村人に語って聞かせたのだそうです。スパエク・トムで演じられるのは物語の一部分だけですが、語りのリアム・ケーでは物語の始めから終わりまでそろっています。

チョックという語り部(もう亡くなっていますが)の老人の語りをテープに取って起こしたものが1983年に出版されています。これがとてもおもしろいので少しずつ訳してみることにしました。最初のほうはなんだかわかりにくいのですが、だんだんおもしろくなるから読んでくださいね。



リアム・ケー物語は、仏教が興るよりも以前、水が湧き、大地が生まれ、八人の仙人すなわちナロット仙、カライヤコット仙、モック・ブオン仙、ブネーク・ブルーン仙、モハー・メークモニー仙、カライヤカオト仙、プレア・カーソップモニー仙、プレア・クルツ仙がいた頃から語られてきた長い長い物語である。

仙人たちは水を作り、大地を作り、大地を司る神々の国を作り出した。十七人のプロム神が集まり相談をした。「水が湧き、大地が生まれ、すべては整った。では、この地を支えることのできる者を捜すでしょう。思うに風の神の息子なら、術も力も備えており大地を支えることもできよう」。プロム神の幾人かは、チュンプー・ボパカー蛇も大地を支えるにふさわしい力を持っていると言った。それではチュンプー・ボパカー蛇に風の神の息子と力比べをさせ、どちらでも勝ったほうに地を支えさせようということになった。かくしてチュンプー・ボパカー蛇はスメル山に飛んでゆき、尻尾をしなわせ山にぐるぐると七回も巻きつけた。鎌首を広げ太陽を遮り地上を闇に包んだので、ひどい混乱が沸き起こった。一方、白馬に乗った風の神の息子は真っ赤に燃える口を持ち、片手に聖なる剣、もう一方の手には珠の笛を握りしめていた。笛を吹きならすと大嵐が巻き起こり、嵐は年の始

めの雷のような音を立てて蛇の腹の中へ飛び込んで行った。水は沸き立ち大地も森も激しく揺れた。風は蛇の腹の中を吹き荒れて身体の中をすっかりと干上がらせ、うろこまでも乾いてしまった。蛇ががっくりと頭を垂れると、風の神の息子は片手に輝く剣を掴み、もう片方の手で蛇の頭を掴んでこれを掻き切って落とした。蛇は最後の言葉を叫んだ。「風の神の息子よ。この首を落とすなら、どうか三つに分け、ひとつを天上界に、ひとつを中央界に、ひとつを地獄のアヴィチャイ界に生まれ落ちるようにしてくれ」。こうして頭のひとつは中央界に、ダウダラーという娘となって生まれた。ダウダラーは八つの方角に仙人を訪ね歩き、子供を授けてくれと頼んだ。七人の仙人は、授けてもよいが神の力を備えた子供にはならないと言い、モハー・カライヤカオト仙のところ行くようにと助言した。そこでダウダラーはモハー・カライヤカオト仙のもとを訪ねて行った。仙人は十二粒の丸薬をこねてやり、それを飲んで娘は十二人の子供を生み落とした。

- 第2章 -

カイラーサ山の上にお座りになっていたアイソー神のことを話そう。毎日夕刻になると、五百人の神々がアイソー神の謁を賜わりに来る。皆がノンタカ・アカンカマーソーの頭を撫で回して通るので、アカンカマーソーの頭はやがてつるつるに禿げてしまった。頭がしびれてちくちくと痛むのでアカンカマーソーは「もう我慢がならぬ」と、アイソーのところへ訴えに行った。「神々、女神たちがひどく私の頭を撫で回すのです。どうかお助けください」。アイソー神は答えた。「ノンタカ・アカンカマーソーや、人差し指を私に向けなさい。衰えぬ術を吹き込んでやろう」。アカンカマーソーが人差し指を突き出す、アイソー神は呪文を唱えその指に神の術を吹き込んでやった。「もしおまえの頭を撫でる神がいたら、指差してやればよい」。

そして五百人の神々がいつものようにアイソー神の謁を賜わりにやって来た。アカンカマーソーの頭を撫でようとしたので、アカンカマーソーはさっと指差した。するとそこにいた五百人の神々すべてが、びゅうと風に飛ばされ宇宙の外側へと消えてしまった。アイソー神は弟のノリエイ神に尋ねていた。「なあ、弟よ。神も魔物も誰ひとり私たちの謁を賜わりに現われないが、これはどうしたことだろう」。ノリエイ神は答えた。「昨日の夕刻、ノンタカ・アカンカマーソーが神々、女神たちを指差し、宇宙の外側へ飛ばしてしまったのですよ」。アイソー神は嘆いた。「おお、弟よ。私もここにはいられない。あいつは私を指差して、宇宙の向こうへ飛ばしてしまうかも知れない」。そうしてその場を逃げ出し五百頭の水牛の群れに入って暮らし始めた。

アカンカマーソーは、自分の主人である神が都を捨てて逃げたのを知った。そこでアイソー神のおられた場所へ上がり込み、ポーカヴァダイ・スライ・ソチアター・ウマーテイという名の娘を自分のものにしようとした。アカンカマーソーの望みに気づいた娘は言った。「ああ、幸あらんことを！私のだんなさまは都を捨てておしまいになり、今や私が頼

れるのはおまえだけ。もしおまえが私を好きだというのなら、私のするように踊ってくださいな。私がどんな型を作って踊ろうが、同じようにしなくてはなりませんよ」。そうして神々は音楽を奏で、娘は踊り始めた。アカンカマーソーは娘に従って踊った。娘が自分の太股を指差す型をとったのでアカンカマーソーも自分の太股を指差しすと、太股は砕け散ってしまった。そこへノリエイ神が、片手に輝く剣を握りしめて飛び出してきた。もう一方の手でアカンカマーソーの頭を掴むとその首を打ち落とそうとした。アカンカマーソーは両手を合わせて懇願した。「これほどの栄華を誇る都で私ごときの命を取ってどうします」。「おまえのような盗人を生かしておくわけにはいかぬ。たった今、この場で首をはねてやる」。ノリエイ神がそう言うと、アカンカマーソーはあきらめてこう頼んだ。「それならどうかあなた様のように、顔を四つ、手が八本の姿に生まれ変わらせてください」。ノリエイ神は「私と同じに四つの顔と八本の手を持つ姿を与えるわけにはいかぬ。代わりに十の顔、二十本の手をもつ姿にしてやろう」と答え、ノンタカ・アカンカマーソーの首をはねた。投げ捨てられた首はタウラッ・サキアムの国に落ちた。こうして十の顔と二十本の手をもつリアップは、タウラッ・サキアム王とダウダラーの間の息子たち十二人兄弟のひとりとして生まれ変わったのだった。

(曲) プロム神の血を引く、クロン・リアップナーソー、アソー・トライモック、アソー・トライカーイ、モハカーイ・ヤクサー、ヴィロルメーク、ヴィロルチョムバン、クンピカー、コンポアン、コンパン、ペアカネーへ、コレパン、ヴェイリアップ、さらにムール・プレア・ロアム。

コレパンは母より輿を授かり、リアップは勝利の傘を受け給う。

リアップはコレパンより奪いし輿を駆り、アイソーの神の国を目指したり。

- 第3章 -

ポーカヴァダイ・スライ・ソチアター・ウマーティについて話そう。ウマーティは義弟に向かってこう言った。「だんなさまがこの都を捨てて逃げておしまいになってから、もうずいぶん経ちました。あなた、どうか500頭の水牛の群れと暮らしているお兄さまを訪ねてみてくださいな」。それで、アイソー神の弟であるノリエイ神は空を駆け、500頭の水牛の群れを訪ねて行った。美しい天女の姿に身を変えて群れの中へ入ってゆくと、アイソー神はその天女の姿を目に入れるなり、さっと神の姿に戻って天女を捕えた。ノリエイ神はもとの姿に戻ろうとしたが間に合わず、アイソー神の精液はすでにあふれ出て天に流れそうになった。アイソー神はあわてた。「落としてはならぬ。天の16界が燃え尽きてしまう。これを地上に落としてはならぬ。火が起こり、地にあるもの全てが灰になってしまう」。それならば風の神に預けるより他はなく、風の神は精液がこぼれ落ちぬよう、そよそよと風に乗せて漂わせた。

- 第4章 -

行者の妻、カエムチャンについて話そう。行者は妻をあづまやに置き、精神修行のために森へと入って行った。妻が留守を守っていると別の行者が現われてカエノーや神々やインドラ神、プロム神の話をして聞かせた。カエムチャンは言った。「ああ、退屈。おじいさん、どうにかならないかしら」。行者は「わしは呪術を身につけたところだ。娘や、わしを指差してみなされ。力を授けてやろう」。カエムチャンが指差すと行者はその指に神力を授けてやり、こう告げた。「退屈なときはどこでも指差せば、思いが叶うであろう」。そして行者はまた術にいっそう磨きをかけるためヘーマピアンの森に戻って行った。さてそれからカエムチャンはあづまやを守っていたが、どうにも退屈になったのでアイソー神の国を指差した。するとアイソー神が降りてきて愛し合った。しばらく後のある日、カエムチャンはプロム神の国を指差した。プロム神は降りてきて愛を交した。またその後のある日、カエムチャンは太陽の神を指差した。太陽の神は降りてきてやはり愛を交した。そしていくらかときが過ぎ、カエムチャンは身ごもったのだった。森から戻った仙人はいぶかしんだ。「わしはおまえに一度たりとも触れたことはないのに、どうして身ごもったのだろう」。そして考えた挙句に、これは自分の業なのだろう、以前ほんの少しばかり煩惱を抱いたことがあったがそれが消えずにいたのかも知れないと思った。そうして十度月が巡り、ふたりの子供が生まれた。三色に輝く肌を持つ美しい子供で、行者は大変に喜んで大事に抱えあやして育てた。

ある日、行者はふたりの子供を抱えて水浴びに出かけた。水際にスヴァハーイという名の雌猿がいたが、妙なことを口にした。「おや、じいさまったら自分の子でなく人の子など抱えてどうしたこと」。行者はおかしなことを言う猿だと思ったが、ふと思いついてこう念じた。「もしもわしの子でないなら、水の中に放り込んだ途端この子らが猿となって生まれ変わるよう、そして渦巻く水によって、大河の七色の砂に捕えられてしまうよう」。そして子供たちを水に放り込むと行者は庵へ引き揚げてしまった。カエムチャンが子供はどうしたのかと尋ねるので、行者は答えた。「ああ、おまえ、わしはあの子らを川に捨ててしまったのだ。もう渦に巻かれて流れて行ってしまったよ」。カエムチャンはこれは他ならぬスヴァハーイの入れ知恵のせいだと思い当たり、「神が救いに来るまでおまえの尻が岩にはりついているように！」と呪いをかけた。

この頃、プロム神はいらいらと落ち着かずにいた。その目を見開くと、二匹の猿が水の底に囚われているのが見えた。「おお、私の息子よ。あの行者がおまえたちをこの大河に放りこんだのだな」そう言うと神は水の底へと潜りふたりを抱え上げて自分の国へと連れて行った。そしてカハカムの花を手折ってきて振り撒き、大きな都を創り出した。これをカハカムの都と名付け、この二匹の猿に与えてやった。兄猿にはピアリー、弟猿にはソクリープと名を付け、さらにコニル、コノルという猿の将官に猿兵を大勢、神力で創り出した。カハカムの猿兵はその数80アカオにもなった。(続く)

注) 80アカオ・・・先生に聞いてもアカオがどういう単位か判明しなかったのだが、ともかくおそろしいくらいの量を表わす。

- 第5章 -

岩に尻が張り付いたままのスヴァハーイはどうしただろう。風の神がアイソー神の精液を運んできて彼女のところまでやってきた。彼女が大きな口を開けてあくびをしたので風の神はこう言った。「娘よ、私に向かって口を開けなさい。神の力をおまえにやろう」。猿の娘が口を開け風の神がアイソー神の精液を注ぎ込むと、それは身体中に染みわたった。その日から娘は身ごもり、きっかり十度の月を数えると美しい男の子を生み落とした。

ふたりの王子のことを話そう。アイソー神はカイラーサの山へ戻って来た。そこへコレパンが輿を御してやってきて助けを求めた。アイソー神は手を広げて、追ってきたリアップを遮りこの国に入ってきてはならぬと言った。リアップがしかし無理にも押し入ろうとするので、アイソー神はひどく腹を立て、アイラワン象の牙をねじ折るとリアップに向かって投げつけた。牙はリアップの胸の真ん中に突き刺さり、背中まで突き抜けた。リアップはプロム神の国へと飛んで行き牙を抜いてくれと泣きついた。プロム神はこれを抜いてやろうとしたのだがどうにも抜けぬ。それで今度はインドラ神の国へ駆けて行った。ところがインドラ神にも抜くことができない。インドラ神は、技工の神のところへ行くようにと言ってやった。技工の神は輝く玉石ののこぎりを取り出し、前はちょうど胸板のところで、後ろはちょうど背中ので切ってやった。しかし象牙はやつの胸の中に残った。それからというものやつは力を備え、その力を使って天の十六界で暴れ回ったから、神々、女神、天女たち、宮女たち、プロム神もインドラ神も震え上がって宇宙の端を逃げまどった。インドラ神は天女たちを連れてリアップのもとへ行き、毎年百人差し出すことを約束してことはやっと収まった。リアップというやつはどんな動物にも手を出した。雌象に手を出してクチリンとクチリーという名の子をなした。魚の間にはマチャーノップという娘ができた。鹿と戯れたときはクァンタ・バクサイという子ができたし、ハゲタカと愛し合って生まれた子はアサオ・バクサイといった。めんどりとの間にはチャウシーパン、犬の間にはサオシンカーという娘を得て、さらにナムヌアックという娘との間にクラム・ムアンという名の娘をもうけた。

- 第6章 -

それからインドラ神が精神修行に出してしまうと、リアップはこっそりとインドラ神の正妻であるポーカヴァダイ妃を自分のものにしようと企んだ。そこで館の扉を開けようとしたが開かないのでトッケイに姿を変え門の上に隠れ、インドラ神が戻って来て呪文を唱え扉を開けるのを聞いていた。神は呪文を唱えて扉をしっかりと閉じて休んだ。やつはすっかりと呪文を覚え込み、次に神が出て行くと、易々と扉を開けて妃と床を共にした。そうしてことが済むとさっさと帰って行った。インドラ神はやがて館に戻り妃と床に入ろうとしたが、妃は「先ほど共に休んだばかりですが、またなさいますの」といぶかしんだ。インドラ神は答えた。「わしは今初めて帰って来たのだぞ」。妃は言い返した。「いいえ、確かにあなたさまでした」「いやいや、わしではない」「いいえ、私が私が見たのはだんなさ

ま、あなたのお姿に間違いありません。そしてインドラ神はその千里眼ですべてを見抜いた。「リアップのやつは仕業に他ならぬ」。ポーカヴァダイは嘆いた。「私はこれでも天界の女。夫がふたりも三人もなどということは許されませぬ。インドラの神よ、私はこの命を絶ち、リアップの妻アキー・ニアックの胎内に入って生まれ変わることにいたしましょう。そして私が再び生まれた暁にはランカーの都を焼き尽くしましょう。その火は七日間燃え盛り、すべてを灰と散らすでしょう。そしてきっかり十カ月が過ぎ、アキー・ニアックの腹から生まれ落ちた。母の胎内から出るなり娘が「ロリアック・ランカー、ロリアック・ランカー！（ランカーが焼ける、ランカーが焼ける！）」と泣き声を上げるので、リアップはおかしく思い十二人の将官たちを集め、占い師のピペークを呼んで尋ねた。「わしの娘はどうしてまた『ローリエイ・ランカー』などと泣くのだろう？」。ピペークはひれ伏して答えた。「娘を七日間ここに置いておくならば、ランカーの都は燃え尽き、灰と散ってしまいます」。それでリアップは娘をかめに入れて川に流してしまった。かめは七日間流れに漂って行った。しかし神の過護により、娘は人さし指から出る乳を吸って生き存えた。

かめはさらに流れて行き、仙人の住む庵に近い岩にひっかかって止まった。ミトラー仙はその日、なにやら胸騒ぎがして落ち着かずにいた。杖をつき布袋を肩にかけて表へ出ると、岩にかめがひっかかっているのが目に入った。見るとかめには女の赤子が入っているので仙人は驚いた。「おお、小さな娘よ。誰がこのようにかめに入れて水に流したりしたのだ」。そうして仙人は娘を抱き上げて庵へ連れて帰り、自らの五本の指を吸わせて育てた。その指からは母の乳房から流れるのと同じ、乳が出るのであった。仙人は娘にセダー・チャウスライという名を付けた。セダーはやがて天女のように美しい娘に成長した。そこで仙人は神力を使い「ルティ・チャン・プラーニュ・プラーの矢（輝ける月光の威力をもつ矢）」を創り出し、「この矢を持ち上げることでできた者に娘を妻として与えよう」と事触れをした。プレア・プーム（土地神）、プレア・ピエイ（風の神）、プレア・ペイスローブ（稲の神）それに十二人の神々がこれに挑んだが、矢をほんの少しも動かすこともできなかった。モハー・クパール・トム（大頭の魔物）やリアップさえもこれを持ち上げることはできなかった。自らの力を誇る王たちが百二十人もやってきたが、やはり矢はびくともしないのだった。さて、この話はこれでいったん終わりとしよう。

- 第7章 -

天界の平穏は破られ、混乱に渦巻いていた。宇宙界すべての神々やプロム神たちは集まり、頭を寄せて考えた。「どうしてまた天界にこのような混乱が沸き起こったのだろうか？」「あの傍若無人なりアップが天界を荒し回っているせいであろう。天女たちもうかうかしていられなかった。なにしろ、インドラ神は一年に百人をリアップに差し出すと約束したのだ。「私たちはどうしたらよいのでしょうか。インドラの神にお出でいただき、ノリエイ神のお姿になってこの事態を治めていただくのがよいのではないのでしょうか」。そうして神々、女神たちはインドラ神を呼ぶため、大勢で空を飛んで行った。神々たちの願いを聞くと、

インドラ神は自分の国から降りてゆきノリエイ神に姿を変えてこう告げた。「十二人のプロム神よ、神々、女神たちよ。我々は大海から蛇を引き揚げ、魔物たちと賭けて綱引きをしよう。勝ったほうがこの世を支配し、負けたほうは仕える身となればよい」。そうして海の底から蛇を引き揚げ、これを綱にして引き合った。地は揺れ森は傾き、海はざあざあと音をたてて波打った。空はごうごうと荒れ狂った。神々、女神、天女たちは花を捧げ舞を舞って勝利を祈願していたが、蛇の頭の側を持って引いていた魔物たちが優勢であった。これを見ていたソクリーブ（猿の王族）は考えた。「ああ、このひとつしかない世界が魔物の手に落ちてしまう。こうとなったら私が蛇の尻から手を入れてやろう」。そう言うなりソクリーブは蛇の尻から手を突っ込んだ。蛇は身をよじってもがいたので身体はふたつに割けてしまった。インドラ神は舞い降りてきてノリエイ神の姿に身を変え、これをつなげてやった。このとき地が傾いて、神は聖なる剣を取り落としてしまった。剣は海中に落ちて魚たちを切り刻んだから、わにや鮫、モコーはあわてふためいた。大海の魚たちが剣に追われ切られ死んで行くのを見て、ソヴァン・カイチャパー（金のかめ）は剣を掴みノリエイ神に返してやった。インドラはその国より降りてきてノリエイ神の姿となったが、その後ブレア・リアミア（リアム王子）として世に姿を現わすこととなる。四人の菩薩がこの世に生を受ける始まりである。まず4人の神がトッサロット王の第一妃であるノンティアテヴィの胎内に入りリアム王子として生を受け、また同じように七人の神がブレア・レアック（レアック王子）となって、トッサロットの第三妃ニアン・パウの息子として生まれた。さらにふたりの王子が、第二妃の息子としてこの世に生まれた。四人の王子は、後代に不幸の続くことのないよう地上の魔物を絶やすため、この世に生まれ集ったのであった。なにしろ魔物どもは悪さをし放題、穏やかで楽しくなんの苦しみもないはずの天界が、今や不穏に陥り神々、女神、プロム神、天女たちが災難を被っているのだった。

さてこうして各々の母の胎内より四人の王子が生まれると、トッサロット王は息子たちに告げた。「さあ、王の血を引く誉高い息子たちよ。我々はこの都を守るために、誰よりも優れた神力を備える仙人を探しださねばならぬ」。トッサロット王の都がどこかという、それはノコー・スライ・アユティヤー（麗しきアユティヤーの都）である。四人の菩薩はすでにこの世に姿を現わした。リアムに続きレアックが生まれ、ピロットが生まれ、サモットロットも生まれた。トッサロットは言った。「私の大切な四人の息子よ。力を備えた仙人を探せ。そして神術を学ぶのだ」。菩薩たちはひれ伏し手を合わせて父王を拝すと、四人連れだって師となる仙人を求めて旅立って行った。

- 第8章 -

妃、ポーカヴァダイの後を追うように命を絶ったインドラ神はノリエイ神の血を引くリアム王子となり、トッサロット王の息子として生まれ変わった。このときトッサロットには三人の妃がいた。正妻はリアム王子の母のニアン・ノンティアテヴィ、第二妃はピロットとサモットロットの母でコルケーサイ、そしてレアック王子の母がニアン・パウである。

国を治めるトッサロット王についてのいきさつを話そう。王はあるとき太陽神と戦った。太陽神は矢を放ち、トッサロットの乗る戦車の車輪を粉々にしてしまった。しかし第二妃が手を貸して車輪と輻を元通りに直してやったので、王は戦いを続けることができた。太陽神はさらに矢を射って火を放ち地を焼き尽くそうとした。トッサロットもまた矢を放ってクルット（ガルダ）を創り出し、この火を消し止めた。こうしてトッサロットは太陽神の軍に打ち勝ち太陽神は負けを認めた。トッサロットは第二妃に告げた。「おまえには恩ができた。おまえの子供は誰より先に王位につけることを約束しよう」。その約束は十二年後のピロットとサモットロットについて果たされることとなる。

- 第9章 -

四人の王子は父王と母たちにいとまを告げ、修行の旅に出て行った。ブレア・クルッフの山にたどり着くと、四人のアイサイ・ブルーン（火の力を持つ仙人）が庵で修行しているのに出会った。リアム王子は仙人たちの前に恭しくひれ伏した。「子供たちよ、どこへ行くのだね」と仙人に尋ねられてリアムは答えた。「私たちは師より術を学びとうございます」。仙人はこれを喜んで受け入れ、好きなように学ぶがよいと言ってやった。ピロット、サモットロットそれにレアックもそれぞれ四人の仙人の前にひれ伏し、仙人は全員を快く受け入れた。王子たちは七日間学ぶとすっかり術を身に付けたので、仙人は神の力を備えた弓矢と剣を呪術で創り出してこれを与えた。「この矢は名を『アキー・ヴィアハ・ブラーニュ・ブラー（輝く火の矢）』と言う。この矢を受けたものはすべてもとの生を再び受けることができる。獣の生を受けていた魔物はもとの魔物に戻り、神の力を避けて逃げて行くだろう」。矢を授かると王子たちは仙人のもとを辞し都へと戻ることにした。仙人も王子たちに祝福を与えて送り出した。王子たちは父王のもとに帰ったが、その後何週間かを過ごす父王と母たちは師の恩を思い起こし、果物などを持たせて仙人に捧げに行かせた。

- 第10章 -

五百人の魔物の娘たちのことを話そう。娘たちはアイソー神の妻の座を得たいと考え、神を訪ねて行った。アイソー神はその野心を知ると、握り飯をつかんで五百人の娘たちに向かって投げつけた。握り飯をぶつけられた娘たちは、カーカーソー（からす）に生まれ変わった。目は火のように燃え、足は鋼、くちばしは玉石であった。からすたちが連れだってヘーマピアン（ヒマラヤ）の山を目指して飛んで行くと、火の眼をもつ四人の仙人が見えた。この四人こそ四人の王子を教育した師であった。からすたちは一気に襲いかかり、寄ってたかって仙人が肩から下げた布袋を食い千切ってしまった。仙人たちは慌てふためき庵へと駆けこんだが、からすどもは入れ変わり立ち替わりやってきて食いものを漁ったり、枝に止まって待ち構えていたりした。そして「出てこい、仙人め！」と騒ぎたて

た。仙人のほうも「おまえたちのしたいことはわかっているぞ」と叫び返した。仙人たちは七日間をじっと庵のなかで過ごし、からすたちもあきらめて、しまいには一匹残らずみな飛び去ってしまった。

ちょうどそのとき、四人の王子たちが仙人の庵を訪ねて来た。王子たちが大声で師を呼ぶと、仙人はこれをからすと思って怒鳴り返した。「おまえたちのやりたいことはわかっているぞ。わたちを食いたいのだろう！」。王子たちは再び叫んだ。「お間違えです、私たちは先生の弟子です！」。それで仙人はようやく気づいた。「おお、おまえたち。わしの庵に何の用があって来たのだね。火の目と鋼の足と玉石のくちばしをもつカーカナソーが五百匹も現われて、ひどい仕打ちをしていったのだ。さあ、早く中へお入り」。王子たちは果物をたくさん携えてきていて、四人の仙人各々に恭しくこれを捧げた。そして尋ねた。「からすどもはどこへ行ったのでしょうか。見当たりませんが」。仙人は答えた。「あいつらは食いのものを求めてヘーマピアンの上へ飛んで行ったのだ。どうにも空腹に耐えかねていたようで、長くはここにいられなかったのだ」。ノリエイ神の名を継ぐリアム王子は、弓矢と聖剣を肩にかけ、神馬の背にさっと飛び乗った。三人の弟王子も続いて背にまたがった。からすどもを見つけて王子たちが矢を放ち、また剣をすらりと抜くと、轟音が鳴り響き地が揺れた。剣は軽々と舞い、五百羽のからすの首を次々に切り払った。首は地に落ちると、もとの五百人の魔物の娘に生まれ変わった。

「カーカナソーはすっかりいなくなり、魔物の娘に戻り都へと戻って行きました」。リアムたちが報告すると、仙人は大変喜び王子たちに祝福を与えた。そして王子たちは仙人にいとまを告げて、また自分たちの都へと帰って行った。

- 第 1 1 章 -

4人の兄弟は都へと帰り、父王と母の前に身を低く伏し、礼儀正しく挨拶をした。そしてこれまでに起こった出来事について話した。仙人に会ったこと、500羽の獰猛なカラスを退治したこと。話を聞き終えると父王は言った。「おお、それなら四人の息子たちよ。弓と剣の腕がどれほど上がったか、さあ、我が目の前でその力を披露して見せておくれ」。そこでリアム、ピロット、サモットロット、そして末の弟レアックの四人は、弓を引き矢を放ってみせた。海の水はごうごうとうなり、地響きが鳴り、矢はメール山の回りを七度回ったために山の頂がかしぐほどであった。サテパリポアンの山は震え、十六界の天は大地震のように揺れた。神々、女神たち、それにプロム神たちはうろたえ「これほどの音はどこから響いてくるのだろう」とささやき合った。ある神は「これこそいずれ大地を治める徳をもつ者の矢の音に違いない」と断言した。サンブリーの国ではあわれクルットの幼鳥が巣から地に落ちてしまうし、魔物は男も女も、半人半鳥の獣であるカンナラーもカンナライも、逃げ惑い山の洞に身を潜めた。大海の波は碎けて真っ白に泡立ち、すべてを覆い尽くした。これこそ、四人が身につけた徳の力であった。トッサロットは四人の息子たちが、他のどの国の王をもってしても超えられぬ素晴らしい力をつけたのを知り大変満足し

た。そこで大臣、側近、家臣たちを召集し、息子たちに王位を譲る決意を表した。ピロットとサモットロットのふたりを即位させアユティヤーの国を治めさせるというのだった。これを機にリアムは父王と母に別れを告げて都を離れ森へ入る決心をした。父王は驚いた。「息子よ、森の中へ出て行くことなど考えないでくれ」。必死でこれを止めたがリアムは父をなだめ、ようよう納得させて都を出た。弟王子のレアックは涙を流して兄の後を追い、その足にとりすがった。リアムは弟を抱きかかえ言い聞かせた。「なあ、愛しい弟よ。私を追って来てはいけないよ」。しかしレアックはただ泣いて尊い兄にすがりつくばかりである。結局、リアムはこの末の弟を引き連れ、都を後にし森へと向かったのであった。

- 第12章 -

ふたりがたどり着いたカラヴァットの平原には、葉の生い茂るたくさんの枝をつけた大木があり、セミの声が鈴を鳴らすように響いていた。セミの声を聞き、わが身の哀れを思いながら歩いていると、いつしかバンカエ山のふもとに着いた。そこにはソンバウム・クパール・トム（巨大な頭）という名の魔物があり、五千の兵を従えていた。魔物は、菩薩のようなふたりの姿を認めて大声を上げた。「やい、そこに行く人間ども！おれさまの山に上がってこようとするか。来ればその命はないと思え」。リアム王子は恐れることもなく答えた。「魔物よ。私の矢を避けられるかね。もし避けられなければ死を見るのはおまえたちの方だよ」。魔物は山の大木を引き抜き抜くと、王子に戦いを挑んできた。リアムは弓を構え光り輝く矢をつがい、魔物に向かって放った。王子の言葉通り、矢は魔物たちを一気に滅ぼしてしまった。

リアムは弟を従えて山を越え先へと進んだ。小川を渡り谷を越え、次なる山を目指して行った。モユラー山へ着くと、また魔物がいてその名をコムクロティアといった。そいつは五万の兵を揃えていた。リアム王子たちが歩いて来るのを目にすると魔物は叫んだ。「やいやい、人間ども。おれの神聖ななわばりに入って来るか。来れば死を見るだけと思え」。リアム王子は答えた。「魔物よ。私の行く手を阻んでくれるな。敢えて阻むと言うのなら、命を落とすのはおまえの方だ」。その言葉を聞き、かっとなった魔物が玉の棍棒を振り上げると、棍棒からは火が噴きだした。リアムは精神を整え矢をつがえながら弟に言った。「弟よ。私のそばを離れずにいておくれ」。レアックは光り輝く剣で兄を守り魔物どもをなぎはらい、次々と死に追いやった。コムクロティアのやつが大声をはり上げて兵を呼ぶと、またすさまじい数の兵が押し寄せてきた。しかしリアムは神の力を備えた矢を放ち、魔物をみな退治してしまった。

戦いは終わった。リアムは弟を従えてその山を越えた。さらに行くとバダエンという名の山に着いた。弟王子のレアックは提案した。「兄さん、このバダエンの山で修行をしないでしょうか」。さてこの山には夫を亡くした女の魔物がひとりいて、見目麗しい夫がほしいものだと願っていた。この女の魔物は名をサオポンナカーといった。サオポンナカーはレアックの姿をひと目見るなりその麗しさにすっかり熱を上げ、言い寄った。魔

物などに言い寄られてひどく気分を害したレアックは、片手で魔物の頭をひつつかみ、もう片方の手で剣を構えると、その首を切って落とそうとした。サオボンナカーが手を合わせ必死で命乞いをするので、レアックは首をはねるのはやめ、代わりに鼻と耳をちょいとそぎ落とすにとどめてやった。サオボンナカーは泣きながら、バダエンを守る魔王コーのところへ駆けこんだ。「人間どもが私にこんなひどい仕打ちをしたのです！」。コーはサオボンナカーの姿を見て激怒した。そして家臣を呼び、兵を召集するためのドラを叩かせた。ドラの音は国中に響き渡り、魔物たちはわらわらと集まってきた。獰猛なる魔王は命じた。「やあ、みなもの者！あの下劣な人間どもを捕えてこい！」。それから激しい戦いが始まった。雷鳴かと思うほどの轟音が鳴り響き、飛んで行く魔物で天空は埋めつくされた。レアックは兄王子のところへ駆け戻って伝えた。「魔物どもが大群をなしてやってまいります！」。リアムは驚きもせずそして躊躇もせずに、弓に矢をつがえて放った。魔物の兵はリアムの矢を受けるとばたばたと倒れた。魔王コーは怒って玉の棍棒を振り回す。棍棒からは炎が噴き上がり、空を赤く燃やした。リアムの放つ矢は水を生みだしたたたく間に火を消した。コーはまた棍棒を振り、罨を作り出して空一面に張り巡らす。リアムが矢を放つとそれは無数の剣となり罨をひとつ残らず切り裂く。こうしてコーとリアムの戦いは続いたが、ついにリアムの鋭い矢が魔物の首を捉え、コーは森の中にどうと倒れ息を引き取ったのだった。

リアムは弟を引き連れ、その場を去り旅を続けた。

- 第13章 -

さて、ハヌマーンが生まれたときのことを話そうか。やつがよちよち歩きできるようになったころのことだ。ふと空を見上げると真っ赤に輝くお天とうさまが見えた。やつは母親に聞いた。「あの真っ赤な獣はいったい何さ？」。母親は答えた。「ああ、あれはね、おまえの食べ物だよ」。そうと聞くやハヌマーンのやつはぱっと空へ飛び上がり、太陽神の乗る車の、先端の飾り木に飛びついた。ところが太陽神の燃える炎であっという間に身体は焼け焦げ、やつは地面にころげ落ちて行った。車に残ったのは細かな毛の一本だけであった。輝く車に座していた太陽神は、小さな白猿が飾り木に飛びついたかと思うと転げ落ちて行くのを見ていた。太陽神が残っていた一本の毛を拾いそれに聖水をかけてやると、それは大きな白い猿の姿に戻った。命を取り戻したハヌマーンは再び飛び上がり、神の車につかまって騒ぎたてた。「おまえはおいらの食いもんだ。今すぐ食べてやるからな」。太陽神は笑った。「まあ、待て白猿よ。腹が空いているなら口をお開け」。そしてハヌマーンが、この太陽というやつを食ってやろうと口を開けると、神は呪文を唱えその口の中へ輝く光の輪を吹き込んでやった。こうしてハヌマーンは口の中に火のように燃える七色の光を授かり、母のもとへと戻って行った。母のスヴァハーイはハヌマーンをそばへ呼んで言った。「息子や。おまえに渡さなくてはならない宝物があるのだよ。今それをおまえにあげようね。じいさま、ばあさまの代から引き継いできた大切なものだよ」。そう言ってスヴァハーイが

取り出したのは美しい耳環であった。徳のある者にだけみえる耳環、徳のない俗人には見えはしない耳環なのだと母は言った。そしてスヴァハーイは言い聞かせた。「いいかい。おまえの主人となる人は、ひとりには緑のお顔をもち、もうひとり方は白いお顔をしているはず。そのような方に出会ったら、母の言葉を思い出すのだよ。」

そしてしばらくの後ハヌマーンは母にもとを離れ、おいしいタマリンドの新芽を探しに森へと出て行った。ちょうどリアム王子がレアック王子を引き連れてタマリンドの大木のもとにたどり着き、身を横たえて休んでいるところであった。ハヌマーンはそのふたりの姿に心魅かれた。「このふたり、この菩薩のようなお顔は、インドラの神のようでもあるし、神さまのようでもある。ただのお方とは思えぬ気品、おひとり方は緑のお顔、もうひとり方は白いお顔・・・ああ！このおふたりこそおいらのご主人ではないか！」ここでこの猿は自分の力を試してみたくなった。この主人がほんとうに徳の力を備えているかどうか試してやろう。ハヌマーンはタマリンドの葉を枝からしごき取り、気高いリアム王子の身体を覆いきるほどにかぶせてしまった。レアックは、白猿が木の葉をしごいては兄王子の身体に散らしているのに気づいた。よく見ればその白猿はきらきらと輝く耳環をはめている。レアックは兄王子を揺すり起こした。「兄さん、猿がタマリンドの葉を兄さんの身体に落としていますよ」。目を開けたリアムは木の上の猿を見上げ、その猿の両耳にはまった美しい耳環に気がついた。「弟よ、あの猿は素晴らしい力を持っているようだよ。もしあの白猿が本当の神の力を持っているのなら、私が放つ矢を避けることができるだろうね」。そしてリアムは弓を構え猿に向かって次々と矢を放った。ハヌマーンはひょいひょいとこれを避け、タマリンドの葉だけがばらばらと落ちて、すっかりなくなってしまった。ハヌマーンは木から飛び下りるとリアムの前に手を合わせ、矢を射るのをやめてくれるように頼んだ。リアムは弓を下ろすと、ハヌマーンは深くとひれ伏し、自分を家来にしてくれるようにと願い出た。どんなところへでもついて行くと誓いを立てた。それで王子はこの猿も引き連れて行くことにし、さらに森の中を進んだ。ハヌマーンに弓矢をかつがせて、リアムは先頭を歩く。弟のレアックは真ん中に行く。ハヌマーンはレアックを観察していたが、その華奢で愛らしい姿は女のものであるので、どうも威厳を感じて敬うという気にもならず、歩きながら弓の先でちょいちょいとレアックの尻をつついて遊んでいた。レアックはいささか気分を害して兄王子に言いつけた。「兄さん、ハヌマーンのやつが、弓の先で私の尻をやたらとつつくのです」。リアムはハヌマーンにやんわりと、人の尻をつついたりするものではないよ、と諫めた。そしてレアックには、さあもう注意もしたし、気にせず歩を進めようと言ったのだった。ところがハヌマーンときたらいたずらをやめるどころか、いつまでもレアックの尻をつつくのをやめなかった。チュレイの木々の茂る森に着くと、菩薩の智恵をもつ王子はレアックに向かって言った。「弟よ、私のすねの毛を引きちぎることができるのはふたりのうちのどちらだろうね」。ハヌマーンはさっと進み出で申し出た。「私が引きちぎって見せましょう」。リアムは輝くすねの毛を引っぱると「おまえはこれを千切れるのだね」と念を押し、その毛をハヌマーンの身体に縛りつけ、それから毛に呪文を吹き込ん

だ。ハヌマーンは「なんだい、こんな毛でおいらを縛ったりしてさ」と文句を言ったが、もちろんそれは聞こえないように心の中でつぶやいただけだった。そしてハヌマーンはその毛を引き千切ろうと勢いをつけて飛び上がった。ところがその毛はどこまでもどこまでも伸びて行き、ハヌマーンは内心「いったいなんで長い毛なんだ」と舌を巻いた。と、伸び切った毛は今度はものすごい勢いで縮んだので、ハヌマーンは地面で頭を打ち顔を打ち、尻をぶつけ、手足も折れんばかりで、筋肉のすべてに力を入れてこれを止めようとしたが毛の勢いには勝てず、三度試みたが、しまいには遠くまで引っぱる気力も失せたのだが、毛は空のかなたまで行ってしまうのではと思うほどに伸びそしてやはり縮んだので、ハヌマーンはまたもや激しく尻を打ち、筋肉はばらばらに壊れてしまうようだった。ハヌマーンは頭を低く垂れて言った。「私の力はもはや地に落ちました。毛の一本も切れぬほどです。しかしこの毛の力、これが徳のある方の力というものなのでしょう」。リアムは次にレアックを呼んで言った。「なあ、弟よ。おまえは私の毛を引き千切ることができそうかい?」。レアックは兄のすねの毛をつまみ、次々にむしってみせた。その様子を見ていたハヌマーンはようやくこのふたりが自分の主人となるべき徳のある方々なのだと改めて確信したのであった。そしてハヌマーンはレアックに非礼を詫び、同じ母から生まれた兄弟のように親しくしてくれるようにと頼んだのであった。リアムはハヌマーンがこのようにレアックを敬い慕うのを見て大変満足した。こうして、ノリエイ神の血を引くリアム王子、心優しきレアック王子、勇敢なハヌマーンは旅を続け、きっかり七日間ののち、ミテラー・ボライの国に着いたのである。

- 第14章 -

聖仙ミテラーについて説明しよう。ミテラー仙は、鉦を叩き国中にお布れを出した。勝利の弓を持ち上げられる者がいるか力試しをするというのである。大勢の神々が集まってきた。風の神、雨の神、火の神、残忍な魔王のリアップさえもがやってきた。都に入り切らぬほどに集まった神々たちは、この輝く弓を持ち上げようと試みたが、誰ひとり動かすことすらできぬ。徳による力を誇る王たちが百人も集まってきたが、やはり誰も思い通りに動かすことはできない。七日間というもの、誰ひとり持ち上げることもできないままに、大地と海を揺るがすほどのどよめきだけが響き渡っていた。ミテラー仙は言ったのだ。もしこの弓を引くことのできる者があれば、孫娘のセダーを妻として娶らせよう。そしてこのセダーのいう娘は、最近ではその比類なき美しさが神々のうわさにのぼるほど、まるで天女のような愛らしい娘なのだった。このとき、大地を治める力を備えたリアム王子は菩提樹の木陰にたどり着き、身を横たえて休んでいるところであった。ハヌマーンはその足元に座り、疲れた足を揉みほぐしてやっていた。王族たち、神々や魔物たちが群れと集まり、弓に手をかけるたびに沸き起こるどよめきは、その木陰までも響いてきた。リアムは言った。「レアックよ。あの響いてくるどよめきは何だろうね。太鼓や笛の音は地を揺るがすほどだよ。弟よ。ちょっと行って、何の祭事が執り行われているのか見てきておくれ」。

それでレアックは兄に命じられるままに都へ入って行き、人々が弓を持ち上げる競技に大騒ぎしているのを見た。みな、満身の力を込めて弓に手をかけては疲れ果てて手を下ろすのだった。レアックは弓の前に進み出ると、足の親指でちょっと矢を突ついてやった。たったそれだけだったが矢はぐるぐると七回転もしてしまった。レアックは思案した。「この程度で動くのなら、私でもこの弓を持ち上げることはできてしまう。ここはひとまずやめておいて、兄さんにまかせることにしよう」。そしてレアックは兄の待つ木陰に戻り、見てきたことを報告した。「兄さん、あちらでは勝利の弓矢を持ち上げる競技をしていたのです。聖仙が、もし持ち上げることができたなら孫娘のセダー姫を妻として娶らせようと布れまわったからです。兄さんならきっとセダー姫を娶ることができると思いますけれど」。リアム王子は話を聞くと弟に言った。「それではその弓矢を持ち上げに行こうではないか」。そして三名は揃って聖仙のもとへと赴き、礼儀正しく三度身体を折って挨拶した。聖仙は尋ねた。「神の力を備えた弓矢を持ち上げに来たのかね。もしおまえにできたなら私の孫娘を娶らせよう」。リアムは黄金の台に近づくと、そこに載せられた弓を軽々と持ち上げた。片手の力だけで十分であった。それからリアムは十六界の天に向かって矢を放とうと構えたが、聖仙はあわてて押しとどめた。「天界に矢を放ってはならぬ。神々の住む天界、インドラやプロムの神の住む国がすっかり燃えてしまうからな」。そこでリアムはつがえてしまった矢をヘーマピアンの森に向かって放とうとした。聖仙は悲鳴をあげた。「ヘーマピアン森に射ってはならぬ！森は焼け、獣たちが一匹残らず死に絶えてしまうぞ」。リアムは困って聖仙に尋ねた。「それではどこへ向かってこの矢を放てば良いでしょう？」。聖仙は命じた。「それではクアエク（カラス）の国に向かって射るがよい」。リアムはクアエクの国に向かって矢を放った。クアエクの国は七日七晩燃え続けた。炎は弱まることなくごうごうと音をたてて燃え続け、そのために地は揺れ、天界は震え、神々たちは落ち着いていることもできず、天界から逃げ降りてきて菩提樹の下に避難した。怖いもの知らずの魔物までがヘーマピアン森を逃げだした。聖仙ミテラーは、リアム王子のもつ威力に驚嘆した。「なあ、若人よ。ここへとどまっておくれ。わしはおまえにこの国を治めてもらいたいと思うのだ」。リアムは聖仙に向かって礼儀正しくひれ伏して答えた。「私もここにとどまらせていただきたいと思います。ただ、私が何より大切にしております弟のレアックと、白猿を一匹、共に居させていただきとうございます」。さて、このときセダー姫はこっそりとリアム王子の姿を見ていた。その凜とした姿にひと目で心を魅かれ、慕う気持ちで胸がいっぱいになってしまった。しかし姫は声をたてることもなく、仏の像を納めたあずまやに静かに身を潜めていた。

リアムたちがミテラーの都にとどまるようになって幾日かがたったが、リアムはいまだセダーの姿を目にしていなかった。ひと目見たいと思うのだが、高貴な乙女だと神々がうわさするのを耳にするばかりであった。ある日、聖仙はリアムに向かって言った。「わしは祝言の儀のために花を摘みに行ってください。セダーはあのあずまやで静かに時を過ごしておるが、決して近寄ってはならぬ。わしが花摘みから戻るまで、決して手を触れてはなら

ぬ。よいか、わしの言葉を忘れるでないぞ」。そうきつく言い含めると、聖仙は杖を手に取り布袋を肩からかけ、さっと手を振りヘーマピアン森へと飛び立って行った。そしてモハーボン、トゥロヨン、ミアルダイ、ユッタオといった、赤や黄色の美しい花々を摘みにかかった。

聖仙が森へと出て行きだいたい過ぎたころ、リアムはどうにもセダーの姿が見たくて仕方なくなった。そこで、せむしの番人に、聖仙がどこにセダーを隠しているのか尋ねた。このせむし男は女に興味を示さない性質だったので、聖仙がセダーの番をまかせていたのだった。せむし男は困って答えた。「だんなさま、おいらはじいさまがこわいですから、それをお教えするわけにはいかないですよ」。リアムはあきらめなかった。「もしおまえが教えてくれるなら、せむしを治してやるし、ちゃんと男にもしてやるよ」。そう言うとリアムはせむし男に向かって呪文を唱え、聖水を振りかけてやった。すると曲がっていた背はしゃんと伸び、そして男としての性質もとり返したのだった。番人は言った。「姫さまが見たいのなら、仏像と一緒におられるよ」。それでリアムは姫を探しに行ったが、なにぶん顔を知らないで見分けがつかない。もう一度、番人のところへ戻ると尋ねた。「あるのは仏像ばかりで姫の姿は見当たらないよ」。番人は答えた。「だんなさまよ。もう一度行って目を指で突ついてみるがいい。突いてみて、仏像ならば瞬きもなさらんだろうが、姫さまならたまげて飛んで逃げるに違いないよ」。リアムは再び仏像の並ぶあずまやへ足を運んだ。そうして美しい顔をした仏像の目を突ついてみると、それがまあ姫その方で、いきなり目を突つかれたもので驚いてすっこんで逃げて行った。リアムは追いかけて行ってしっかりと捕まえ、姫が怖がらないようになだめすかした。「ああ、愛しい君よ。私は都を追われてからというもの、ずっとそなたのような、女性のよいところをすべて備えた高貴な女性を探し続けていたのだよ」。そう言うなりリアムは姫をきつく抱きしめ優しくその身をまさぐり、思いを遂げてしまった。

このとき聖仙はヘーマピアン森にいたが、千里眼によってことの次第を知ってしまった。「ええい、リアムのやつ、あずまやにおいて私の娘とことに及んでしまうとは！まだ縁を結ぶ儀も執り行っておらぬのに。なんということだ。力をもつ王子たる者、常ならば己を慎み、このような過ちなどおかさぬものを」。聖仙は大急ぎで花を摘み終えるとヘーマピアン森を後にし、都へと飛んで帰った。不機嫌な顔で黙ってあずまやに座っていると、リアムとセダーが現われ聖仙の前にひれ伏した。聖仙は重々しく口を開いた。「リアム王子よ。わしが止めたのにこれを聞かずとあらば、もはや息災には暮らせまい。必ずや別離が待っている。しかし若人よ、近くへお寄り。そうなってしまったからには祝福を与えよう」。リアムとセダーは聖仙のそばへ寄り、手を合わせて深々とひれ伏した。聖仙はふたりが離れることのないよう祈りを捧げ、ふたりの仲を認めてやった。こうしてあずまやにおいて祝儀を終えると、リアムはセダーと再び寝床を共にした。このときハヌマーンはふたりの様子を盗み見していた。王子が姫の身体を撫でまわし身体中に接吻しているのを目にすると、ハヌマーンはたまらなくなつて駆け出し、思わず木に飛びついて自分も接吻などして

みるのだった。まあ、彼らの話はこの辺でひとまず置いておくとしよう。

- 第15章 -

コマールポットの山に住む四人の聖仙について話そう。聖仙たちは四人揃って森に散歩に出かけ、そこで六匹の蛇が犬と交わっているのを目にした。四人は蛇たちを、なんと恥知らずな獣だと言って激しくののしり、六匹の蛇たちはひどく罰の悪い思いをした。夕刻になり、聖仙たちは自分たちの庵へと戻った。六匹の蛇は話し合っていた。「今日は聖仙たちにずいぶん恥をかかされたものだ。我々六匹みなで行って、あのじいさんたちを亡き者にしてやろうじゃないか。あたりも静まった夜更けを待って蛇たちは聖仙の庵へと忍び込み、水がめの中へ毒をプツと吐き入れた。そうしてまた、揃って自分たちの住処へと帰って行った。さてこの水がめの下に一匹の雌のカエルが住みついでいて、一部始終を見ていた。雌ガエルはつぶやいた。「私は身寄りもないただのカエル。昨今はおじいさまたちのおかげで暮らしているようなもの。なのに今、蛇たちが六匹も来ておじいさまの水がめに毒など吐きかけて行ってしまった」。雌ガエルはよくよく考えた末に決心した。「いっそ、おじいさまたちより先に死んでしましましょう」。そう言うなり雌カエルは水がめの中へと飛び込んだ。蛇の毒が身体を刺し、雌カエルは息絶えた。

空がようやく明るくなったころ聖仙は目を覚まし、庵の外へ出た。口と顔をすすごうと水がめの傍へ寄り、その水面に一匹の雌カエルがゆらゆらと浮かんでいるのに気がついた。聖仙は精神を集中し、ことの次第を見抜いた。昨日わしらが笑いものにしたので蛇たちが気を悪くし、夜の間にもわしらを殺してやろうとやって来たのに違いない。哀れなのはこの雌ガエル。わしより先に命を絶とうと水がめに飛び込んだのだ。そう言い聖仙は毒の入った水を捨てるとすばやく、修行によって得た力を使い強く願をかけた。「この雌ガエルに、女の子としての生が吹き込まれるよう」。そして聖仙が呪文を唱え、器に入れたコンティエの水を雌ガエルの身体に振りかけてやった。すると即座に雌ガエルは女の子の姿になった。聖仙はこの娘を大切にすべからず、名をモントーキリーとつけてやった。モントーキリーは年も十五になるとそれはそれは美しい乙女に育ち、その姿はまるで天界に住む天女のようにであった。そのため、聖仙は心の中に芽生えた邪念に苦しむようになった。娘をこれ以上自分のもとに置いておくわけにはいかぬ。そう考えると聖仙は娘を抱き寄せ言い聞かせた。「どうやらわしは、おまえをアイソー神へ捧げに行くのがよさそうだよ」。そして聖仙は娘を抱えたまま矢のように空を駆けて行った。アイソー神の国へ着くと、聖仙は賛辞の言葉を述べ、「私はモントーキリーという娘を、あなたさまに捧げるため連れて参りました」と申し出た。アイソー神は大変に喜んだ。娘と言葉を交し、それからきらびやかな館をひとつ、娘のために作り出してやった。聖仙は祝福を捧げると、神のもとを辞し自分の庵へと戻って行った。この話はこれでひとまずおしまいにして。庵に戻った聖仙については特に語ることもあるまい。

- 第16章 -

ヤ・トゥカエという名のでかい図体の魔物のことを話そう。あるときこの気性の荒い魔物は思った。「おれはずいぶんと長いことアイソー神のところへご機嫌伺いに行っていない」。そう言うなり魔物は矢のように空を飛んだ。アイソー神の謁を賜わるため館へ上がろうとすると、トゥカエ（トカゲ）が「トゥカエ」と鳴いた。魔物は「はい、トゥカエでございます。お目通りをお願いいたします」と答えた。しかし見回してもアイソー神の姿は見えぬ。見ればそれは一匹のトゥカエだったので、魔物トゥカエは腕をぶん回してトゥカエを殴りつけた。するとアイソー神の館ごと傾いてしまった。自分のしでかしたことに気づくと、魔物トゥカエはその場を逃げ出した。さて空がほのかに明るくなった早朝、鳥たちが鳴き始めたころアイソー神は目を覚ました。そして館全体が傾いているのに気がついた。アイソー神は驚いた。「どうしてわしの館がこのように傾いているのだ?」。そしてゴングや大太鼓を打ち鳴らして魔物たちを召集した。そして、この館をまっすぐに立て直すことができた者には、妃をひとり好きに選ばせよう、どの女を選ぼうと咎めはせぬと公言した。太鼓の音はいたるところに響き渡り、魔王トサモックの耳にも届いた。トサモックはアイソー神がゴングと大太鼓を打ち鳴らしてお触れを出しているのを知ると、棍棒を手にして矢のように空を駆けて行った。アイソー神のもとへたどり着くと、ひれ伏してこの神を拝し「偉大なる神よ、何事かお困りのことでもありませんでしょうか。打ち鳴らされる太鼓の音がすべての魔物のもとに届いておりますが」、と尋ねた。アイソー神は答えた。「トサモックよ。昨日の夜更け、何の獣かわからぬが、わしの館を傾かせて行ったのだ。それで、誰でもこの館をまっすぐに美しく直すことのできる者がいればその者に妃をひとり、好きに選ばせようと言ったのだ」。トサモックはアイソー神の館をもとと寸分違わぬ美しさに直してみせた。アイソー神も館がすっかりもと通りの美しさをとり戻したのを認めると、トサモックに向かって、好きな女をひとり選ぶがよいと言ってやった。そうとなればトサモックは身の程もわきまえず、都で最も高貴な妃を捕まえに走った。偉大なアイソー神に何の遠慮もなく、畏れの気持ちも抱かずに思いのまま選びとったのである。そして空を駆けて行ってしまった。ノリエイ神は兄であるアイソー神に苦言を呈した。「兄上、何ともつたいないことを。都で最も高貴な第一妃を与えてしまうなど、私は納得できませぬ。ほかの側室を与えるならば何も口出ししませぬが、都の誉となる妃を他の女たちと同じに扱ってはなりません」。そう言うとノリエイ神は矢のように空を駆けて後を追った。トサモックの前を遮り、花や作物の植えられた庭園を作り出した。しかし庭園の木々はみな、根が空を向き、枝先が地に刺さっているのである。一方トサモックは都で最も誉高い妃を抱きかかえていたのだが、腰に抱えれば腰に火がつき、肩にかつげば肩に火がつく。どこに抱えても火が噴き出してきて、仕方なく頭の上に乗せて空を駆けていた。ノリエイ神の作り出した庭園の上を行きすぎるとき、トサモックは大声で「じいさん、何故また根っこを上を枝葉を下に植えたりしているんだ。それでは実も喰えやしない。人のやることを知らない

愚か者だな」と叫んだ。年寄りに身を変えたノリエイ神は言い返した。「おまえの方こそ愚か者ではないのかね。そんな火を噴く女など抱きかかえて、腰に抱いて腰に火がつき、肩にかついで肩に火がつき、抱えたところ、抱えるところみな燃えてしまっているではないか。なあ、リアップよ、そこまで愚かなことをしてどうするね」。そして「別の娘と取り替えてくるがいい、ちょうど昨日聖仙が、娘をひとりアイソー神に捧げていったところだ。モントーキリーという天界に住む天女のように美しい娘であったぞ」と助言した。トサモックは年寄りのその言葉を聞くと、迷うことなく身を翻しアイソー神のところへ妃を返しに戻った。「気高きな神よ、私は妃を取り替えていただきたくて戻ってまいりました。昨日捧げられたという、モントーキリーという名の娘をいただきとうございます」。アイソー神もそれを聞くとほっとして晴れやかな気分になり、「ああ、リアップ、好きなようにするがいい。もしもうひとりほしければ望み通りにするがいい」と言ってやった。リアップはモントーキリーを捕まえた。魔王は例えようもないほどの喜びに打ち震え、娘の顔中に接吻を浴びせ、身体を抱き撫でさすり、そして再び空を駆け出した。モントーキリーを抱いて空を駆けていると猿王ピアリーの国の上を通りかかった。ピアリーは、魔王が美しい娘など連れて自分の国を通り過ぎようとしているのに気づき、烈火のごとく怒り出した。「なんと図々しく無礼な輩。雄々しいクルットの王の力と高德を備えた私の力を知らぬと見える」。言うなり空へ飛び上がり長い尻尾をしなわせ振り上げると、魔物の足の先から首までをぐるぐると巻き上げ締めつけた。腕を振り上げ殴りかかると娘にまでも当たってしまった。顔は腫れ、口も腫上がったリアップは叫んだ。「何故、尻尾で足から肩まで巻き上げ締めつけ、人の妃を奪い取って、いったい何のつもりだ?」。ピアリーは憤然として怒鳴った。「この、図太いリアップめ。私の領土の上を飛べると思うな。美しい妃を抱えいぱりくさって私の都を横切ろうとは。まったくこの腹黒いふとどきもの、人の都に不躰に現われて、おまえの命はもうないと思え。今、私が息の根を止めてやる。しかしまあ、百歩譲っておまえを行かせてやってもよい。この輝くように美しい妃は私が自分のものにして、おまえには返さぬからそう思え」。リアップは悔しさに大声を上げて泣いた。奪われた美しい妃が惜しくてならぬうえ、顔も口も身体中が腫れ上がっている。アイソー神の国へ飛んで戻り、そろりそろりと進み出てひれ伏した。「たった今、妃を抱いてピアリーの国を通りましたところ、ピアリーに妃を奪われてしまいました。偉大な力をもつ神よ、どうか取り返してくださいよう」。話を聞いたアイソー神は答えた。「なんと厚かましいやつだ。まあ、三月ばかり機が熟すのを待て。時がきたら私がピアリーを呼び、取り戻してやるでしょう」。そしてきっかり三月がたち、魔王は再びアイソー神のもとを訪れて、ピアリーからモントーキリーを取り返してくれるようお願いした。それで、威信を誇るアイソー神は召使いを遣いピアリーを呼び寄せた。ピアリーは即座に飛んで参って、ひれ伏した。アイソー神はピアリーにちらりと視線を投げ、言葉をかけた。「何故大胆にも人の妻をさらったりした?連れてきて返すがよい、王たるピアリーよ」。ピアリーは言葉を返した。「やつがあまりに図々しかったからでございます。美しく若い妃を抱え、私の館の上をまたいで行こうとしたの

です。アイソー神はリアップに向かい「今後は人の都の上を勝手にまたいだりしてはならぬ」と言い、そして「何故、妃を連れて来て返さぬのだ？」とピアリーに問うた。ピアリーは答えた。「それはできません。三月もときがたち、すでに身ごもっておりますゆえ」。では、月が満ちるのを待って返すように。アイソー神が言うとピアリーは、「ならば私は妻の腹を裂き、子供は引き取らせていただきます」と答え、都へ戻りモントーキリーを連れて帰ってきた。

そして聖なる剣を取りだしてモントーキリーの腹を裂き、子供を取り上げた。腹の中にいた子供は、ピアリーが腹を切ったときに剣があたり、尻尾がふたつに切れてしまった。さて、モントーキリーをリアップのもとに返したピアリーは、子供を抱えカハカム・ボライの国へ帰った。そして館の女たちに子供の面倒を命じた。乳母となった女たちは、このオンコットと名付けられた猿の王子を、毎日ハンモックに入れて揺すり、あやし、楽しませ、大切に育てた。

- 第17章 -

十の頭をもつ魔王リアップについて話そう。やつはひどく腹を立てていて、毎日むしゃくしゃした気分で過ごしていた。ある日とうとうカハカム・ボライの国へ向かい矢のように飛び出して行った。カハカム・ボライの国に着くなりリアップは大蟹に姿を変え、そのハサミでもって、猿の王子オンコットを挟みつけた。宮女たち、召使いたちは驚きおののき、何と大きな蟹が出たと叫ぶ者あり、王であるピアリーのもとへ知らせに走る者あり、辺りは大騒ぎとなった。ピアリーは駆けつけ大蟹を目にしたが、何事をも見通す徳の力により、それが他ならぬリアップだということを見抜いた。そこでただちにこの大蟹を捕え手ひどい罰を与えようとした。リアップは恐ろしくなり慌てて元の姿に戻ったが、ピアリーは慈悲もかけずリアップを縛り上げ、息の根を止めてやろうとした。リアップはもがいたが逃げ出すことならず、宮女たち、召使いたち兵士たちは一目この魔物を見ようとこぞって集まり騒ぎたてた。なんと図々しいリアップのやつ、ご主人様、生かしておくことなどありませんなどと言っている。リアップは命を取られると思って縮み上がり、必死でひざまづいて命乞いするのだが、蹴られ殴られであっちへこっちへとひっくりかえる。「こんな不届きな輩はいづれまた懲りずに同じことをするに決まっています、生かしてはおけません」と判断を下す声も聞こえる。リアップは身体を折ってひれ伏し懇願した。「どうか人民の依りどころである偉大なピアリー王よ、どうかお慈悲を。命だけはお許してください。私は王子のハンモックを守る召使いとなり、七日の間、王子を抱きハンモックを揺らし、踊りなどして上手にあやして差し上げましょう」。ピアリーは「七日の間、子守りをするというなら、命は取らずにいてやろう。私の息子に仕えハンモックを揺らしているならば、七日の後に解放してやろう」と言って、その申し出を受け入れてやった。こうしてリアップは七日の間、子守りとしてオンコットの面倒を見ることになったのだった。しかしリアップはハンモックを揺らしながら「なあ、オンコット。おまえはモンドーキリーの

息子、わしはおまえの育ての親」と言い聞かせてあやした。七日間、子守りとして仕える日々が終わると、ピアリーはリアップに告げた。「リアップよ、これで日も満ちた。自分の都に戻り以前と同じく都を治めるがいい」。さて、ノリエイ神の血を引くリアム王子のことに話を戻そう。王子はミテラー仙の国におり、愛しいセダー姫のそばを片時も離れずに時を過ごしていた。ある日ふと思ひ立ち、王子は弟のリアックと白猿のハヌマーンを連れ森へ遊びに行った。そこでやはり森へ出て来ていた鳥の王、セダーヨッホに出会った。セダーヨッホが「どうして都を出ておいでになったのですか」と尋ねるのでリアムは、「私はミテラー仙の孫娘であるセダー姫を妻に迎えたところなのだ。今日は森へ散歩に出てみたのだよ」と答えた。そうしてセダーヨッホを誘い、聖仙の庵に戻った。リアムはこの鳥の王を大切な友人としてもてなした。しばらくの後、セダーヨッホは山の洞へと帰って行った。それからリアムはセダーを連れ、リアックとハヌマーンを従え四人揃って森へ再び散策へと出かけたのであった。この話はひとまずここで置いておこう。

- 第 18 章 -

十の頭をもつリアップはヘーマピアンの森へ遊びに行こうと考え、モハーリークという名の魔物を誘った。「やあ、モハーリークよ。おれと一緒に森へ出ようじゃないか」。連れだって空を駆けて行くと、まずモユラー・タナーライという山に着いた。さてリアム王子の一行も四人揃って、森の中をあちらへ行きこちらを眺めしながら歩いていた。そのときだった。邪悪な心をもつリアップは、王子が美しい姫を連れて歩いているのを見かけたのだ。この邪心者は考えた。「おお、あれこそが聖仙の孫娘、天女にも勝る美しさを備えたセダーという娘。あの人間の娘をぜひとも妻に向かえたいものだ」。そしてモハーリークの方に向き直り「なあ、兄弟よ。金の鹿に身を変えて、やつを騙してはくれないか。透き通る珠が弧を描いて角となり、輝く宝石のような蹄を持ち、その毛皮は翡翠のようにきらめき、モニーロアットの石のようにつややかな瞳をもつ鹿の姿になってくれ」。そしてモハーリークの化けた金の鹿は警戒心のかけらもないふうで、首を上げ、ときにかしげ、森の中を王子たちの方へ向かって歩いて行った。案の定、セダーは見たこともない金色に輝く鹿を目にし、驚いてリアムを呼んだ。「だんなさま！どうかあの鹿を捕まえてくださいな！」。リアムは鹿に目をとめたが、何やら怪しいようだと考えた。「ねえ、おまえ。私はあれは魔物が姿を変えたのではないかと思うよ。本当に森の鹿ならば逃げるはずなのに。あれはきっと魔物の策略に違いないよ」。金の鹿はリアムの言葉を耳にすると、疑われてはならないと大急ぎで駆け出した。一方セダーは聞き分けなく、逃げて行く鹿を惜しがってリアムに泣きついた。「ねえ、だんなさま、どうかあの鹿を私のために捕まえてくださいな！」。リアムは仕方なく、「よしよし、泣くのはおやめ。私が必ず捕まえてあげるから」と答え、魔物の鹿を追って走り出した。だいぶん遠くまで後を追わせると、鹿はリアムの声色を使い大きな声で叫んだ。「おおい、リアック！頼もしい弟よ！鹿が私に突きかかってくるよ！」。声を聞きつけたリアックは精神を集中し、願いをかけて大地の女神であるコンヒーンに後

をまかせ、白猿だけを連れて兄王子を助けに走った。レアックは鹿に向かい矢を放ち、矢を受けた鹿は魔物の姿を現した。

一方十の頭をもつ魔物のやつは、血眼になってセダーを探していたが見つけれずにいた。レアックが兄王子を助け起こし、魔物モハーリークが死んだことを告げると、リアムはセダーをどこに置いてきたのかと聞いた。レアックは「姉上はコンヒーン女神に匿っていただいております」と答えた。リアムは悲鳴を上げた。「コンヒーン・コンフオイ女の穴に預けるなど、なんと浅はかなことを！」。これを聞いていたコンヒーン女神はひどく腹をたて、セダーを隠していた大地をぱっくりと開き、リアップからすっかり見えるようにしてしまった。リアップはすっとなで行ってセダーに飛びつき、抱きしめ撫でさすり腰に抱えて空へと飛び上がり、ランカーの都を目指して駆け出した。ところがここで鳥の王、セダーヨッホに出くわした。セダーヨッホは翼を大きく広げて辺り一面を闇に変え、リアップの行く手を阻んだ。リアップは山を越える出口を探して右往左往した。「私の同志の妻を盗む不届きな輩、私はおまえなど恐れはしない。恐れるのはそのセダー姫の指輪のみだ」。セダーヨッホがそう叫ぶのを聞くと、リアップはセダーの指にはめられた珠の指輪をむしり取り、セダーヨッホに向かい投げつけた。指輪を身体に受けた鳥の王は、片翼を折られ大地に倒れた。闇は明け、陽が差し、空がすっかり晴れわたると、リアップは再びランカーの都を目指して飛び続けた。

そのころリアムは、レアックがセダーを匿ったという辺りを必死になって探し歩いていた。しかし愛しい妻の姿はいくらしても見当たらず。嘆くばかりで心は苦しみにつかえ、ついに気を失いその場に倒れてしまった。レアックは兄の身体を抱き起こし、揺すってはみたが目を覚ましてくれぬ。弟王子もまた悲しみに気を失ってしまった。ハヌマーンが水をすくって来て顔にかけてやり、風の神が優しく風を送りドークマイの花の香りを漂わせてやると、その甘く芳しい香りを受けてようやくふたりは目を開けた。リアムはレアックに向かって言った。「弟、レアックよ。兄弟しての縁もこれまでだ。おまえはどこへでも勝手に行くがいい。私はここでおまえとは別れよう。妻が見つからない以上、私ももう俺へは戻らぬ」。そう言い放つと、リアムはハヌマーンだけを家来として引き連れ歩き出した。哀れな弟レアックは、小さな猿を従えて歩いていく兄の後ろ姿を見送っていた。追いつかぬようにひっそりとその後を追いつつながら、その胸は悲しみに張り裂けそうであった。涙をぼろぼろとこぼし、身を引き千切られるような思いで嗚咽した。「弟の私を捨てて、兄さまはどこへ行くというのだろう」。そうして嘆きながら、これもわが身の業と悟って歩を進め、ポタポタと流れる涙もそのままに兄の後を追って行くのだった。一方リアムは、涼しげな水場のあるチュレイの木陰にたどり着いて歩を止めた。レアックは近寄る勇氣もなく遠くから兄の姿を眺めてるばかり、話しかけることなどできそうになかった。リアムは身体を横たえ、眠りに落ちつつもセダーを思い悲嘆にくれていた。「ああ、水場に咲く蓮の香も、美しきセダーの香りを思わせる」。そう嘆き、そのまま気を失ってしまった。兄の様子が哀れでならず、レアックもまた藪の陰で悔やみ泣き濡れるのであった。しばらくしてリアム

は目を覚まし、さて飯を炊くにはどうするのだろうと考えた。王子は薪をひとつ拾って来て、その上に鍋をひとつかけようとしたが、ぐらぐらとして鍋が乗るはずもない。リアックはそっと兄に近づくと言葉をかけた。「兄さま、薪をみっつお持ちになってかまどとすれば、鍋はきちんと乗るのですよ。薪ひとつ、鍋ひとつでは収まりはしないのです」。リアムはそうであったかと納得し、そして薪をみっつ集めて来た。鍋がしっかりと収まると、以前のように弟を傍へ呼び寄せた。「隊列を成そうとするならば、少人数ではどうにもならぬ。兄弟揃い大勢集ってこそ軍を興すこともできよう」。弟に対する怒りもいまやすっかりと消えて、リアムは知らぬ顔をするのをやめ、また弟と共に歩き出した。しかし悲しみが消えたわけではなかった。兄弟は七日間歩き続け、次の山に差し掛かった。

さて、セダーを抱えて飛んで行ったリアップはとうとうランカーの都へ着いた。リアップはただちに十二名の将官と、占い師のピペークを呼び集めた。ピペークは申し立てた。「この姫を都の中に留めることはなりません。長く置きますればいずれ都に火が付き、すべてを燃やし尽くすことになりましょう」。リアップは家来たちすべてに命じ、ドソットの天界にセダーを連れて行かせた。そして洞窟の中に美しい輿を作らせ、そこにセダーを幽閉した。

- 第19章 -

ランカーへの道の途中で、リアムたちは山のふもとを通りかかった。そこでリアムは鳥の王、セダーヨッホが翼を折られて地に倒れているのを目にした。セダーヨッホはリアムに訴えた。「王子よ、徳と智恵があるならばどうか私を救ってください。やつはあなたの妃をさらってゆきました。やつがお妃の指から指輪を抜き取り私に投げつけたため、それが当たった私の翼は折れこのように地に墜ちてしまったのです」。リアムは答えた。「心配することはないよ。私がおまえの羽を元の通りにつないでみせよう」。しかし、セダーヨッホは続けて念を押した。「どうか痕の残らぬようつなげてください。もしもほんのひと筋でも痕が残ってしまったら、私は死を選ぶよりありません」。リアムは言った。「痕が残るといっても髪ひと筋分ほどしか残らぬようにするよ」。セダーヨッホはそれでもだめだと言い張った。ほんのわずかの痕でも恥ずかしくて生きてはいられないと言う。「髪ひと筋の十分の一ほどの痕ならば、良いことにしよう」。セダーヨッホはそのように言ったが、結局、残った傷跡を見てセダーヨッホはリアムに頼んだ。「ああ、私の友よ。どうかその剣を抜き、私の首をひと思いに打ち落としてくれ。そして矢尻の先に刺して放ち、天へと送ってくれ」。リアムはセダーヨッホの望み通り、頭を打ち落としてやった。そして首を矢尻に刺して弓につがえ、十六界の天に向かって射た。セダーヨッホの首は、プレア・パート・レサタイという名の、クルット鳥の王になって新たな生を受け、いつかリアムが窮地に陥ったときには助けに来ることを約束したのであった。

- 第 2 0 章 -

アイソー神の子供である、水牛のモハンサーソーについて話そう。やつは五百匹の水牛を引き連れていたが、やつはこの群れの中に雄が存在することを許さなかった。生まれた子が雌ならば生かしておいたが、雄であったならば生かしてはおかなかった。あるとき、一頭の身ごもった雌がいた。「もし生まれてくる子が女の子なら良いけれど、雄であったら生かしておいてはもらえない」。そう考えたこの雌は、こっそりと森の中へ隠れた。そして臨月を迎えて密かに子供を生んだ。子供は雄であった。母親は子供を隠しながら徐々に群れを離れ、森の奥へ奥へと入って行った。子供が不思議に思い、「どうして他の水牛と一緒に群れに入らないの？」と尋ねると、母親は「戻る訳には行かないのよ。おまえの父親はそれは気性が荒くて、おまえが雌なら良かったけれど、雄と知ったら生かしておいてはもらえないのだから」と教えてやった。そして母親はさらに森の奥へ入ってゆき、そこで草を食わせて子供を育てた。子供が大きくなるとトーピーと名をつけてやった。トーピーは成長し、母親にねだった。「かあさん、もう群れに戻ってもいいころじゃないかなあ」。「まだだめ。もっと力を備えなくては」。そういって母はコントゥオットの木の下で七日間、クロサンの木の下で七日間の修行をさせたのだった。トーピーは、落ちてくる木の実をひとつ残らず角で振り払うことができるようになり、もう一度母を誘った。「かあさん、そろそろ群れにもどろうよ」。しかし母はまだ許さなかった。「まだだめ。七つの草原の草を全部食べ、七つの池の水をすべて飲み干せるようになってから」。そしてトーピーは母と共にさらに修行を続けた。こうしてがっしりとした体格をたくわえ、勇敢な精神を築き上げると、トーピーは母に言った。「かあさん、群れに帰ろう」。そしてトーピーは母と共に群れを目指した。モハンサーソーはトーピーの姿を認めると突進してきた。「おれさまの妻を勝手に連れ出したのは誰だ!」。トーピーはモハンサーソーの角に大した威力はないと見てとり、頭を下げて身構えた。二匹がぶつかりあうと、七十万の雷がいっぺんに落ちたかのような轟音がとどろいた。モハンサーソーは首の骨を折って、死んだ。

アイソー神の孫にあたるトーピーは群れと行動を共にはしなかった。ひとりヘーマピアンヘーマピアンの森の中へと入って行った。七日七晩歩き続けると九つの大海に行きあたった。トーピーは泳ぎ出したが一息に泳ぎ来ることはできなかった。夜になると海底の土を角で巻き上げて小さな島を作り、その上で身体を休めた。そして朝になるとまた泳ぎ始めるのだった。ようやく向こう岸に泳ぎ着くと聖仙の姿が目に入った。トーピーは叫んだ。「おおい、じいさん。ちょっと来なよ。智恵比べをしよう」。「おまえさん、名は何というね?」「おれはトーピーだよ」。聖仙は言った。「年寄りをからかうものではないよ。もしおまえがインドラやプロムや他の神々と智恵比べをして勝つのなら名も上がるだろうが、こんなおいぼれと智恵比べをして負けでもしたら、恥ずかしくてどこにも顔を出せなくなってしまうじゃろうが。どうしても智恵比べなどしたいなら、このまま流れに漂って行き、カハカムという国へ行くがよい。そこにはピアリーという猿王がいる。ピアリーと力比べでもし

ておいで」。そのように諭され、トーピーは再び川の流れてから泳ぎ続け、カハカムの都を目指した。猿王ピアリーの住む都につくと、即座に王を守る兵たちに取り囲まれた。ある猿兵は王のところへ走り、どこからか無礼な輩が現われましたと伝えた。ピアリーは庭園にやってきて、麗しい姿の水牛トーピーと対峙した。ピアリーは剣を手にし、対するトーピーも角を構えて突進していった。そして壮絶な戦いが始まった。海は波立ち、地は揺れた。森も山も十六界の天までもがぐらぐらと揺らぎ、神々も女神たちも恐れをなして天界から飛び立って菩提樹の木の下に身を隠した。太陽も月も星も輝きを放つのをやめ、このふたりの激しい戦いを見守っていた。ピアリーは剣を振り回すと、それはまるで大きな車輪が回っているかのようであった。水牛もチャクラのように角を振り回していた。朝から始まった戦いは昼になってもまったく終わる気配をみせなかった。そうしてようやく双方ともに疲れがでてきたところで、ふたりは話し合った。「地上で戦っているのは、獣も鳥も落ちていていられないだろう。我々は洞窟に入り、今度こそどちらの力が強いかな勝負をつけるとしようではないか」。

さてピアリーの弟であるソクリーブは剣を腰に差し、兄の後について洞窟の入り口までやってきた。ピアリーはソクリーブに言った。「弟よ。もしも青い血が見えたなら、私の血と思ってくれ。そして岩盤を持ってきて洞窟を塞ぐのだ。私はここでトーピーを道連れにして死んでやろう」。そして再び戦いが始まると空の八方に稲妻が白い光を放ち、雷鳴がとどろいた。ピアリーとトーピーは七日間、戦い続けたが勝負はまだつかなかった。とうとうトーピーは尋ねた。「おまえは何故そんなに強いのだ?」。ピアリーは答えた。「私には神がついているからだ」。そしてピアリーも問い返した。「おまえのその素晴らしい力は何のおかげなのだ?」トーピーは答えた。「おれの強さはおれ自身のものだ。七つの草原の草を喰い、七つの池の水を飲み干して得た身体だ。神の手助けなどもらってはいない」。しかしこのときトーピーの両の角には片方五人づつの神が、そしてピアリーの剣の先には十人の神がそれぞれとまっていたのだった。トーピーの、この恩知らずな言葉に腹を立てた神々は、角から下りてみなピアリーの剣へと乗り換えてしまった。そして戦いが続行されると今度こそピアリーはトーピーの鼻を切り落とし、次いで首をもはね飛ばした。トーピーの首から流れ出た大量の血は洞窟いっぱいになり、入り口から外へ漏れていった。しかしピアリーもまた怪我をしていたために、青い血が白い血に混ざり合い、外で待っていたソクリーブはピアリーが命を落としたものと勘違いしてしまった。ソクリーブは大きな岩盤を引いてくると、血のあふれてくる洞窟の入り口をしっかりと塞いだ。ピアリーは血の海の中でもがき続け、もはやここを抜け出すこともできぬまま命果てるのかとあきらめかけた。しかし思いついて振り返るとトーピーの頭を引き寄せ、必死に願った。「トーピーよ、どうか気を損ねないでくれ。どうか私に慈悲をかけてくれ。おまえに真の力があつたならば、きっと私の方が負けていたはずだ」。そしてピアリーは願いを込めて力一杯にその首を投げた。「トーピーよ。おまえの力が本物ならば、この洞窟の入り口を粉々に砕

いてくれ！」。トーピーの首は洞窟を封じていた岩盤を砕き、血は一気に外へと流れ出た。命拾いをしたピアリーはソクリーブをなじった。「何故、岩盤で洞窟を封じたりした？」。ソクリーブはいいわけをした。「雷と吹き荒れる雨風のため、水牛の血が兄さんの血に見えてしまったのです。それで岩を持ってきて洞窟を封じたのです」しかしピアリーはこれを信じなかった。「おまえは、私が治めるこの都や宮女たちがほしくて、そんなことをしたのだろう」。そういとピアリーは履物を脱いで手にすると、こともあろうにそれでソクリーブの頭をはたいた。ソクリーブはひどく自尊心を傷つけられた。「弟とはいえ私も王族のひとり。履物ではたかれるなど、王族の誇りを台無しにされたも同じだ」。そして泣きながら山の洞に入ってしまった。何日も何か月も泣き続け、しまいには自分の目にたまった目やにで大きな蟻塚のような山ができてしまった。

- 第21章 -

それからリアム王子は弟王子を従え、一匹の白猿もともに揃って歩き出した。ドーンコマー・モハーボロポットという名の大きな山に着くと王子は、葉のよくおい繁り涼しげな木陰をつくっているチュレイの木の下で昼寝に入った。この山には水の湧き出る泉があった。眠りから覚めると王子は口をゆすぎ、それからレアックに顔を洗うためにきれいな水を取ってくるよう頼んだ。レアックは谷に沿って歩いて行き、きれいに澄んだ水をたたえた沢を見つけた。その水は、ソクリーブが泣きながら座っている谷間から流れ出ているのだった。レアックは水をすくい、リアムのところへ持って帰った。顔を洗ってみると、その水はまるで腐った死体のように臭った。「おおい、弟よ。この水はとてもきれいに澄んでいるが、ずっと放っておいた死体のように臭いのだ」。偉大な王子はいぶかしみ、この勇氣ある王子は弟と白猿を連れ、水に沿って歩いて行った。すると土の盛り固まったところがあり、そこから人の泣くような、うおーんうおーんという声が聞こえてきた。王子が強い弓の先でつつき、足で蹴り、その固まりをこじあげると、中に大きな猿がいるのが見えた。。王子は尋ねた。「猿よ、どうしてこんなところに座って泣いているのだね？」ソクリーブは両手を合わせて王子にお辞儀をすると、話し出した。「ピアリーという名の私の兄が、トーピーという水牛と洞窟の中で戦いました。水牛の血と兄の血は混ざり合い、どちらの血がながれているのかわからなくなりました。私が岩で洞窟の入り口を塞いでいたので、兄は水牛の首を掻き、それを投げつけて扉を開けました。そして私が、王のものである女や都を手に入れたくて裏切ったのだろうと言い、履き物をぬいで私の頭をはたいたのです。それで私は他のものたちに顔向けできぬほど恥ずかしく、ここへ来て泣いていたという訳なのです。誰よりも秀でて貴い王子よ、私を乗り物となる家来にしては下さいませんか。どこへ行くのでも私の背にお乗せいたしましょう。どうか私に力をお貸しください」。ソクリーブの背は乗るのに充分頼もしく、ノリエイ神の名をもつリアム王子はこの申し出を受け入れた。そしてソクリーブに、ピアリーに戦いを挑む文を送るように言った。ピアリーは、

明日の朝必ず、兄に挑みに訪れるという弟の文を受け取った。そして翌朝。ソクリーブは金銀の装身具で身を整え、切っ先鋭い剣を持ち、空へと飛び上がり兄との戦いに出て行った。兄の目前に出るとソクリーブは「やあ、兄上よ。どちらの腕前が上か、白黒つけようではないか」と叫んだ。ピアリーは言い返した。「ふん、腹黒いソクリーブめが。おれが切り倒して亡きものにしてくれるぞ」。そしてつかみ合い、切り合いの壮絶な戦いが始まった。どちらの勝ちも負けも決まらない、それはまったく互角の戦いだった。二戦目はピアリーの力が勝り、ソクリーブは山の洞穴へ逃げ込まねばならなかった。ピアリーはそれを見届けると、さっと都へ引き返し、いつもと同じように玉座に腰を落ち着けた。ソクリーブは穴から出ると、王子の元へ行って泣きついた。「王子は私を助けてくれるとおっしゃったではありませんか。なのに矢のひとつも放ってはくださらず、私は負けて山の洞へと逃げ込む羽目になってしまいました」。リアム王子は言った。「高貴なソクリーブよ。ふたりとも見たところ全く同じで、どちらが兄でどちらが弟か見分けがつかなかったのだ。間違えるのではと、手を出すわけに行かなかったのだよ。もう一度戦うときには、もし兄が青い衣装を身につけたら、おまえは赤い衣装を身につけ、私にはっきりとわかるようにしておくれ。そうすればおまえに加勢してやることができよう」。そして再び戦いの日がやってきた。ピアリーがすっかり青い衣装で身を整えてきたのを目にすると、ソクリーブは急いで引き返し赤い衣装に着替えた。そして飛んで返り、また取っ組み合いの戦いが始まった。ピアリーはソクリーブの技をねじふせると、片手に剣を構え、もう片手でソクリーブの頭を掴むと首を切り落とそうとした。そのときリアム王子はすかさず、月の光の威力をもつ輝く矢を放った。ピアリーはこの矢をはっしと掴み、「おれに向かってこの矢を放ったのは誰だ?」と聞いた。ソクリーブは答えた。「この矢こそ、神力に満ちた鋭い矢ですよ」。ピアリーは言った。「ああ、それでは弟よ、私から離れるのだ。私も命が消えるときがやってきた。下りて行って言い残さねばならぬこともある。遺言を残し、七日後に私は死ぬだろう」。ピアリーは言葉を続けた。「弟ソクリーブよ。おまえは館に仕える女たちの面倒を見て、都を守ってくれ。おれはもういなくなるからなあ。この神の矢によっておれは死ぬのだともう決まっていたのだ」。そして七日間にサラットの花、サライの花、チョンパイ、ヌオンスライ、モハーホンの花々を飾らせ、家来たちと、宮仕えの女たちを全て集め、先のことをすっかり言い残し終えると、リアム王子の矢はピアリーの胸をまっすぐに貫き、猿王は息を引き取ったのであった。神の矢を受けて死ぬという定めは、以前の誓いから決まっていたことだった。兄弟ふたりが名高い仙人のもとで術を学んでいたころ、兄にドンラップ(小さな象牙の容器)を取りに行ってくれるよう頼み、弟が行かずにいたことがあった。仙人は、人のものを開けてはいけない、見てよいのは自分のものだけだと言い含めてふたつを渡した。菩提樹の木の下まで着くと、兄は弟の器に入っている女も覗いてみたくなった。開けてみると、美しい天女が容器の中から飛び出した。兄は追いかけてこれを捕まえ、欲望を遂げてしまった。それから呪文を唱えて天女の身体を小さくすると元どおりにドンラップに戻し、持ち帰って弟に手渡した。弟が受け取って開けてみると、ふたつの違う香り

がする。「ああ、これは汚れのないドンラップではないようだ。兄上よ、私のドンラップを開けたのだな？」と弟が咎めると、兄はそんなことはしていないと言い張った。開けただろう、いや開けていないと言い合いは決着せず、ついに兄は、もし開けたのであれば将来自分は神の矢によって命を落とすだろうと弟に誓い、弟はこれを受け入れたのだった。

こうして兄に打ち勝つと、ソクリーブはリアム王子を招いてカッハカムの都の玉座に座らせ、猿兵を80アカオにコニル、コノル、ニルペイツ、ニルカンといった将官たちそれにソクリーブとオンコットがその前にひれ伏した。こうしてリアム王子は80アカオの猿兵を味方につけたのだった。

- 第22章 -

リアム王子は全ての兵を率い、レアック王子とハヌマーンを従え、コノル、コニルやソクリーブにオンコットも引き連れて、大軍を整えるところの大勢の猿たちと共に森の中を進んで行った。サマラブームチェイ・カエウモロコット（翡翠の戦場）と名のついた国へたどり着くと、王子はさっそく陣地をたてることにした。もうあたりは猿で埋るほど、そのうちのあるものは山のように大きな身体をもち、水も地も森もぐらぐらと揺れるほどであった。そうして王子が陣地をたてると、リアム、レアックふたりの人間のうわさがそこから中に知れわたり、ランカーの都まで伝わった。それはさておき。洞窟の中に置かれているセダーはどうしていただろう。リアムとの別れにただただ嘆き、目からは涙があふれ、胸は苦しみに震え、声をつまらせて泣いていた。「ああ、私の尊い夫よ。私をどうかお救いください。もしも私を追って来て下さらないのなら、いっそ死んで生まれ変わったほうがましというものです」。そう言うと、姫は声もなくしてその場に倒れてしまった。そのような姫の面倒を見てやれるのはビペーク師の妻だけであった。ビペークの妻は姫が気を失ってしまったのに気づくと、水をもってきて顔をぬぐってやり、そして必死に慰めた。「姫さま、そんなにお嘆きになってはいけません。もっと気を楽しにおもちなさい」。セダーは意識を取り戻すと、また嘆いた。「ああ、ソチアター姉さま、私をどうか死なせてください」。ソチアターは姫をあの手この手でなだめすかし、「まだ早まって死ぬなど言ってはなりませんよ。姫の大切なだんなさまは姫を追ってもうこちらへ向かっているのですから」と話してやった。セダーは「いいえ、そんなことはないと思うわ」と言って首を振る。「いいえ、本当ですよ」とソチアターは辛抱つよく言い聞かせる。「もう『翡翠の戦場』までご到着なさっています。ですから、心配することはないのですよ。どうぞ、姫も明るい気持ちでお過ごし下さいな」。この話もここでひとまずおいておこう。

リアム王子は全ての兵を率い、レアック王子とハヌマーンを従え、さらにコノル、コニルやソクリーブ、オンコットも加えた大軍を整え、これら大勢の猿の兵たちと共に森の中を進んで行った。サマラブームチェイ・カエウモロコット（翡翠の戦場）と名のついた国へたどり着くと、王子はさっそく陣を張ることにした。あたりを埋め尽くすほどの猿た

ちには、山のように大きな身体をもつものもあり、おかげで水も地も森もぐらぐらと揺れるほどであった。王子が陣をたてると、リアム、レアックふたりの人間が戦場に着いたという噂はそこいら中に知れわたり、それはランカーの都まで伝わった。

それはさておき。洞窟の中に置かれているセダーはどうしてだろうか。リアムとの別れにただただ嘆き、目からはとめどなく涙をあふれさせ、胸を苦しみに震わせ、声をつまらせ泣いていた。「ああ、私の尊い夫よ。私をどうかお救いください。もしも私を追って来て下さらないのなら、いっそ死んで生まれ変わったほうがましというものです」。そう言うと、姫は声も失ってその場に倒れてしまった。そのような姫の面倒を見てやれるのはピペーク師の妻、ソチアターだけであった。ソチアターは姫が気を失ってしまったのに気づくと、水を持ってきて顔をぬぐってやり、そして必死に慰めた。「姫さま、そんなにお嘆きになってはいけません。もっと気を楽におもちなさい」。セダーは意識を取り戻すと、また嘆いた。「ああ、ソチアター姉さま、私をどうか死なせてください」。ソチアターは姫をあの手この手でなだめすかし、「まだ早まって死ぬなど言うてはなりません。姫の大切なだんなさまは姫を追ってもうこちらへ向かっているのですから」と話してやった。しかしセダーは「いいえ、そんなことは信じられませぬ」と首を振る。「いいえ、本当なのですよ」とソチアターは辛抱つよく言い聞かせる。「もう『翡翠の戦場』までご到着なさっておられます。ですから、心配することはないのですよ。どうぞ、姫さまも明るい気持ちでお過ごし下さいな」。この話もここでひとまずおいておこう。

- 第 2 3 章 -

魔王トサモックについて話そう。やつは寝床で眠りにつき、夢を見ていた。灰色のハゲワシと緋色のハゲワシが海辺で戦っているのだった。魔物ははっと目を覚まし、すごい夢を見たものと驚いて、すぐにピペークを呼んだ。そして、この夢が何を暗示するのか占うように頼んだ。「弟よ。わしは今しがた、灰色のハゲワシと緋色のハゲワシが激しく戦っている夢をみたのだ。これがよい夢か悪い夢なのか占ってはくれ」。ところがピペークは、占うわけにはいかないと拒んだ。「おおい、弟よ。当たっても当たらずとも構わぬから占ってみよ」。それでもピペークは「占うわけには参りません。きっと兄上の気にいらぬことになりましょう」と拒み続ける。魔王リアップはそれでもよいからと強引に占わせた。「私の占いには」、とピペークは話し出した。「セダー姫を連れ出し、リアム王子のもとへ送り返すべきと出ております。さもないと、ランカーの都はすっかり滅びてしまうことになるでしょう。兄上は、自分の娘に惚れているのですよ」。リアップはこれを聞いてかんかに腹を立て、履き物をぬぐなりそれを手にしてピペークの頭をはたいた。ピペークはひどく気分を害し、また自尊心を傷つけられた。「プロム神の血を引く私の頭を、自分の履き物などではたくとは！もう今日限り、こんなところにはいらぬ。ノリエイ神の名をもつリアム王子の方へつき、このような魔物どもを根絶やしにしてしまおう」。

そう言うなりすぐさまその場を駆け去り、高貴なリアム王子のもとへと走った。王子のところへ着くと、両手を合わせ、身体を深く折り王子を拝してお辞儀をした。そして「王子よ、どうか貴方の足元に私を置き、召使のひとりとして一生お仕えさせてください」と願った。王子はピペークがこのように申し出るのに耳を傾けたが、しかし人の上に立つ王子はこう言った。「魔物よ、どんな魂胆があってここへ来たのかもわからぬのに、おまえを信じるわけにはいかぬ。もしも我々の前で真実を証明できたなら信じてもらえるのだが」。ピペークは、それでは鉛と樹液を火にかけてくれるように頼んだ。煮立った鉛を口に流し、もしも忠誠が真実ならば熱くは感じぬはずと言うのだ。そして鉛と樹液が火にかけられた。ピペークがこれを口に入れると、インドラ神に与えられた力により、それはまるで水のように冷たくなったのだった。今やリアム王子は疑いもなく、はっきりとピペークの忠誠を信じた。「私はこれからおまえをレアック王子と同じように、弟と思って大切にしよう。同じ母から生まれた兄弟と思うことにしよう。弟よ、私はもうおまえを疑ったりはせぬ」。ピペーク師は王子に向かい、もし不誠実なことがあったときにはいつでも首をはねてもらって構わないと言い、三つの約束ごとをした。ひとつは、美しい女には生まれかわらないこと、ひとつは僧正となって生まれかわらないこと。そしてもうひとつは王となって生まれかわらないこと、というのだった。リアム王子はさすがすがしい気分を得た。「弟よ、これこそ完璧というものだよ」とリアムはうなずいた。

- 第24章 -

リアムはすべての兵を召集した。リアムの言葉に耳をすますのは、80アカオの猿たちと、忠実なる白猿のハヌマーン、ソクリーブにオンコット、全てを見通す目をもつピペーク師である。リアム王子は命を發した。「海に橋をかけ、ランカーへ渡るにはどうしたらよいか考えねばならぬ」。ピペークが両手を合わせて深く頭を下げ、申し出た。「恐れながら王子よ。もし橋をかけるならば奥義書に従って行わねばなりません。」「その奥義書とはどこにあるのだ?」。リアムが問うと、ピペークは答えた。「それは、猿の王であるカエソー・チュンブーピアン（香りを放つ花の蕊、の意）が持っております。その都はここより遙か遠くにあり、朝方に飛び立てば日が傾き森が暗くなる頃に着く場所でございます」。リアム王子は重ねて問うた。「では誰を遣わせばよいだろうか?」。ピペークは、「オンコットとハヌマーンをお遣わし下さい。彼らならば持ち帰ることができましょう」と答えた。さっそく王子は、自分に仕える風の神の息子である真っ白な猿を呼んだ。さらに偉大なる王子はオンコットも呼び寄せ、ハヌマーンとともに出立するよう命じた。ハヌマーンは主人の命令を聞き、光り輝く剣をとって腰にさすと、民を治めるこの王子に向かい深く頭を下げ、そして矢のように空を駆けて行った。

日が傾く頃、ハヌマーンたちはチュンブーピアンの国に着いた。チュンブーピアンは火のように燃える眼をもっていて、この目がじっと睨みつけければ何でも燃え上がり灰となっ

てしまうのだった。どんなに獐猛な魔物たちもその威力に恐れをなし、この猿の王と力を戦わせてみようとするものはいなかった。さてこのとき、この猿の王は王宮にいて、金と宝石に飾られ高々と築かれた玉座に座っていた。ハヌマーンとオンコットはこの地にたどり着き、偉大な力をもつチュンブーピアン王の治める都であることを確かめると、館の入り口から飛び込んで行った。高くそびえる玉座についていたチュンブーピアンを前にハヌマーンは礼儀正しい挨拶もせず、飛び上がってしっぽをぐるぐると幾重にも巻き、玉座と同じ高さを作るとその上に座り込んだ。チュンブーピアンは、真っ白な身体のほかでかい猿を見て驚き、この猿を燃やしてやろうと眼に力を込めて睨みつけた。ハヌマーンはこれを受けて立ち大きく口を開けた。チュンブーピアンの炎と、ハヌマーンの炎がぶつかり合った。チュンブーピアンの館の中に火が上がり、ふたつの炎の勢いはまったく互角であった。ハヌマーンの炎は、チュンブーピアンの炎がオンコットの方へ行かぬように遮っていた。チュンブーピアンはこれをみてかんかんに腹を立て、さっと立ち上がり猿をふたりとも捕えて鉄のオりに放り込んでしまった。オンコットもハヌマーンも囚われの身となった。

太陽がメール山の陰に隠れ、夜の静けさが訪れると、オンコットとハヌマーンは身体を縛られていた縄を切り、鉄のオりを引き千切ってすぐさま外へと抜け出した。ハヌマーンはオンコットに声をかけた。「なあ、オンコット。おまえさんは上へ上がり、館のてっぺんを抑えていてくれないか」。そしてハヌマーンは催眠の術を使い、あたりの者をみな眠らせてしまった。兵士も家来もみな、ハヌマーンの術にかかり眠ってしまった。そうしておいてからハヌマーンは地面を引き剥がし、都ごとそっくり持ち上げた。オンコットは急ぎ館に駆けのぼり塔のてっぺんを支え、ふたりしてリアムの陣地へ都を運んでいった。

チュンブーピアンは誰にも両手を合わせて頭を下げたことのない猿であった。この猿の王が敬意を表わしてひれ伏すのは、ただ太陽に対してのみなのだ。白猿ハヌマーンはリアムのもとへ姿を現わし手を合わせお辞儀をすると、「王子よ、どうぞノリエイ神に姿をお変えください」と申し上げた。チュンブーピアンに威力を見せ敬服させるため、リアム王子は顔が四つ、手が八本ある姿に身を変えた。ちょうど夜も明けて辺りが明るくなり始めた。鳥たちは鳴きだし、チュンブーピアンは寢床に目を覚ました。太陽に向かい手を合わせ三度ひれ伏し、目をこらしてあたりをよく見ると、もとの都と様子がひどく違っている。どうしてこんなところへやって来たのだろうか、そうつぶやいてから猿の王は、はっと気がついた。「これこそはリアム王子の徳の力に違いない。もし兵を挙げて戦おうとしたならば、私の方が命を落とすに決まっている。これは頭を下げて降参するべきであろう。軍を差し出し、家族もみな差し出しせば、私も平穩に過ごすことができよう」。そう言うと身体を深く折ってリアムの前にひれ伏し、「どうぞ兵も私もともども家来として数にお入れくださいますよう」とかしこまって申し出た。ノリエイ神の名をもつリアム王子はこれを聞いて大変喜び、言葉をかけた。「なあチュンブーピアン、猿の王よ。我々はハヌマーンを遣わしおまえをこのように急ぎ連れ帰ってしまったが、それというのも我々は橋をかけ

るための奥義書を必要としているからなのだ」。チュンブーピアンはすぐにその奥義書を取って戻りリアム王子に差し出した。

「さあ、我々には奥義書もそろった。ぐずぐずしてはられぬ、ただちに橋をかけランカーの国へ渡り、魔物どもを根絶やしにするのだ！」。それを号令に、猿の兵からなる大軍はせっせと石を運び出し海に橋をかけ始めた。小さい猿は小さい石を、大きな猿は大きな石をかつぎ、そうして山をいくつもいくつも運んで行った。ハヌマーンは自分の毛に山をいくつもくくりつけ、飛んで行っては海の上で身体を揺すり振り落とした。山と山がぶつかり合い激しい波を起こし、轟音はランカーの国まで響き、そのために山々が地面から引き剥がされ崩れてしまうほどだった。猿の兵たち全員が石を運び、大量の石を積み上げ橋を造っていた。ソクリーブ、ハヌマーン、カエソー・チュンブーピアンといった将官たちは80アカオの猿の兵たちを使い、オンコットも次々と大きな山を運んで来ては海の中に落として行った。波しぶきは一層激しく海を荒らし、そして橋は真ん中あたりまででき上がった。

- 第25章 -

このとき十の顔をもつ魔王は、十二人の将官たちを集めていた。アソー・トライモック（三つの顔をもつ魔物）、アソー・トライカーイ（三つの身体をもつ魔物）、モハーカーイ・ヤクサー（巨大な身体 of 魔物）などを始めとして魔物たちがずらりと並び、魔王の言葉を待っていた。「人間どもが橋をかけ出したが、我々はどうしたものか」。魔王リアップはそう言うと、コンピカー（海兵隊の魔物のひとり）に向かって問うた。「人間どもの橋がここまで届かぬようくい止めるため、我々はどうしたものか?」。コンピカーは魔王に向かい三度ひれ伏すと、輝く棍棒を振り回し、矢のごとく空へと飛び上がって行った。そして海の底に寝そべり水をどんどん吸い込み、すっかりと底が干上がるまでにしてしまった。『エメラルドの戦場』まで地響きが伝わり、地はぐらぐらと激しく揺れたので、リアム王子はいぶかしみ急ぎピペーク師を呼び寄せた。「何故また、このように地が揺れるのだ?」。ピペークは石板を首から下ろし、数を書きつけ、足しては掛け割っては掛けし、ことの次第が明らかになるとリアム王子に申し上げた。「コンピカーという名の、おそろしく大きな魔物が海に寝そべり水を飲み干し、すっかりと底を干上がらせてしまったのでございます」。リアムは重ねて問うた。「誰を送ればそいつを打ち負かすことができるだろうか?」。「オンコットをすぐにランカーへお送りください」。

オンコットは輝く剣を腰に差し空を駆けて行くと、身体が腐りきって腐臭のする犬に姿を変えた。身体中を這い回るうじ虫が、こぼれ落ちて魔物の口の中へぞろぞろと入って行った。魔物は息もできなくなり、吸い込んでいた水を噴き出した。水はごぼごぼとあふれ出し、泡立って波立ちトラエンの花のようにしぶきを上げた。コンピカーは慌てて起き上がり、走ってその場を逃げ出した。海はもと通り水をたたえ、猿たちは飛び跳ねて喜んだ。

- 第 2 6 章 -

リアムの家来である美しい白猿のハヌマーンは、膨大な数の山を運んでは海の中へ落と
していた。橋はもうそろそろランカーに届くまでとなり、ランカーの魔王は内心穏やかで
はいられなかった。魔王は娘のマチャーノップを呼んだ。「やあ、娘よ。おまえは魚の兵
たちを集め、人間どもの積んだ石を全て取り除いてしまえ。やつらの橋を我々の国まで届
かせてはならぬ」。マチャーノップは尊い父王の命令を聞くと魚の兵をすべて呼び集め、
人間たちの積み上げた石を取り除かせに行かせた。海の魚たちは、自分たちの主人である
マチャーノップ姫の言いつけを聞くと、みながみな集まりその数は数え切れぬほどとなっ
た。コハオもコマルもリアチロッホも現われて、大きな石をくわえては捨て、橋の跡形も
残らぬまでにしてしまった。

夜が明け朝になった。リアムの家来である風の神の息子、白猿ハヌマーンは猿の兵たち
をみな引き連れ、橋の様子を確かめにやって来た。そして積み上げた石が跡形もなくな
っているのを目にした。「せっかく積んだ石をこのように運び去ったのは何の獣だ?!」
ハヌマーンは怒りに震え、猿の兵全員に命じあたりを探らせ、自らは大海に潜っていった。
山のように大きな岩を見つけ、ハヌマーンはその陰に身を隠した。そこへ、これも山ほ
どの大きさもあるコマル魚の王がやってきて岩をくわえ上げた。ハヌマーンはさっと飛びか
かり魚の上にまたがった。腕でえらをこじあげ、厳しく問い詰めた。「誰に遣わされて我々
の積んだ石を取り除いているのだ?」。魚の王は答えた。「ソヴァン・マチャー姫のお言
葉で、ふたりの王族の石を運び出すよう命じられたのです」。ハヌマーンはわけを知ると
矢継早に問い詰めた。「ソヴァン・マチャーはどこにいるのだ? 答えてもらおう。おまえ
は私をマチャー姫のところへ連れて行くのだ。いったいどこに住んでいるのだ?」。そし
てハヌマーンはコマル魚の王の背に乗り、ソヴァン・マチャーの住む館に向かった。着い
てみると、そこはきらきらと光り輝く御殿であった。

マチャーノップは海の底に暮らしているのだった。ハヌマーンは御殿の正面に立ち、姫
を呼んだ。扉を開けると、しかし水は中へは入って行かないのだった。ハヌマーンは中へ
入りあつという間に姫を捕えたが、よくよくその姿を眺めれば、非の打ちどころもなく美
しさである。「ああ、私はおまえのような素晴らしい女を探していたのだ。出会っただけで
すっかり心を魅きつけられてしまったようだよ」。そしてハヌマーンは私の愛しい君よ、
だの、おまえを第一夫人にしようだのと甘い言葉でなだめすかし、ついには寢床をともに
しようと言って思いをとげてしまった。ハヌマーンと一緒にしてしまうと、姫の方も御
殿に仕える侍女や家来たちのことをすっかり忘れ、ハヌマーンの方も宮仕えの身であるこ
とをすっかり忘れソヴァン・マチャーと愛をはぐくむのに夢中になってしまった。「ねえ、
おまえ。私のことをどれほど愛しているかい?」とハヌマーンが尋ねると、ソヴァン・マ
チャーは「私をお守り下さる母や父と同じほどですわ」と答えた。ハヌマーンが「では父
上と夫では、どちらの方が大事だね?」と聞くと、ソヴァン・マチャーは「夫のほうが」

と答えた。「もし本当に夫の方を愛しているなら、おまえは魚の群れに命じて石をもと通りに積みさせてくれなくてはいけないよ」。ハヌマーンにそう諭され、ソヴァン・マチャーノップは魚の群れに命じた。「持って行った石をみんなもとの場所へお戻しなさい」。その夜一晩で、魚たちは石をもとの通りに積み上げた。そうして橋は、ランカーの国へもうすぐにも届くほどになったのだった。

注) ソヴァン・マチャー、マチャーノップ、ソヴァン・マチャーノップ、は言い方が違うが同じ姫を指します。いずれも『金の人魚姫』という意味です。

- 第27章 -

魔王リアップは腹わたを煮えくり返らせていた。魔王はコンポアンという名の魔物に、人間どもの橋を打ち壊しにいくよう命じた。リアップの弟であるコンポアンは命令を聞くと、輝く石でできた棍棒を掴み魔術を使って飛び立つと、海の中へと潜って行った。コンポアンは積まれた石の上に、呪術でたくさんの木の実を作り出した。クーレーン、セーモアン、大きなクイの実、どれもすばらしく赤く熟した実である。猿たちが来たら橋の下に隠れた身体を揺すり、海の中へ振り落としてやるつもりであった。

さて、夜が明けてハヌマーンが猿たちを連れ橋の具合を調べにやってきた。チュンブーピアンからオンコット、小猿大猿ぞろぞろと揃って現われ、橋のたもとまでやってきて、たわわに実った木の実を見つけ、もいだりむしったりの大騒ぎとなった。ハヌマーンはしかし、慌てて猿たちをとめた。「気をつける。ひとつ食べればひとり死ぬ。ふたつ食べればふたりが死ぬぞ。みなのも！食べてはならぬ！魔物が毒を盛っているはずだ」。あるものは手に握り、あるものはもぎ、またあるものはすんでのところまで口に放り込むところであったが、ハヌマーンがそう叫ぶのを耳にして、みな急いで手にした木の実を放り出した。さらに前進して行くと、やけに石が盛り上がっているところがあった。ハヌマーンはコンポアンがその下の海に潜んでいるのを見て取り、地が最も高くなったところを胸板でぐっと抑えつけてから、オンコットに剣を投げてよこすよう声をかけた。オンコットが剣を投げてやると、ハヌマーンはそれを受け取り石の上から突き刺した。鋭く研がれた剣は魔物をとらえ、息の根をとめた。こうして橋はまたもとの通り平らになり、コンポアンは橋の下に潜ったままで息絶えてしまった。

アティカム、アティパラムのふたりの魔物は見張りをしていたが、コンポアンが死んでしまったのを見ると魔王に知らせるため都に駆け戻った。そして「怖れながら申し上げます。コンポアン様がお亡くなりになりました」と告げた。魔王リアップは驚き、そして激しく嘆いた。「ああコンポアン、わしの弟よ。かつては共に天界で暴れ、インドラもプロムも、すべての神々が我々に怖れをなしていたほどであったのに、今や白猿ごときに破れ

命を落とすとは！」。そのように叫び、悔しさに胸を叩き、地も揺れるほどに悲しみをあらわにしたのだった。

- 第 28 章 -

一方、リアム王子は猿の兵たちに橋造りを続けさせていた。チュンブーピアン、ニルアエク、ニルカン、コノル、コニル、それにハヌマーン、ソクリーブ、オンコットなど、十二人の将官たちが集まり、橋造りについて智恵を出しあっていた。みな智恵がまとまると、再び作業にとりかかった。

さて、80アカオという膨大な数の猿たちはみな駆けずり回って石を運んでいたが、ハヌマーンは手でチェス遊びをしながら、足で石を受け取っていた。チュンブーピアンの息子であるニルアエクが石をかついできてハヌマーンに投げてよこすと、ハヌマーンは足を伸ばして受け取った。ニルアエクはこれにひどく気分を害し、食ってかかった。「やい、ハヌマーン。おれらをばかにしてるのか？ かりにも王家の血を引くおれの差し出す石を、足で受け取るとはどういうことだ」。ハヌマーンは「まあ、ニルアエクよ、そう怒るな。俺の手はチェスに忙しいんだよ」とあしらったのだが、それはいつそうニルアエクを怒らせてしまい、とうとう喧嘩が始まった。止めに入ったリアム王子はピペークに、このふたりをどうしたらよいものか占ってくれと頼んだ。ピペークは答えた。「このふたりは生まれ月も干支もぶつかり合うもの同士。ともに働かせるのは無理なことでございます」。

そういうわけで王子はニルアエクを軍の飯炊き係へまわし、ハヌマーンは引き続き軍をまとめることになり、やがて橋はランカーへと到達したのだった。リアム王子はチュンブーピアンを見回りにやり、ハヌマーンも身体の高い猿たちに橋のまわりを見張らせた。こちら側の話はここでひとまず置いておこう。

- 第 29 章 -

では十の顔をもつ魔王はどうしていたか。魔王は十人の将官を集めて問うた。「ノリエイ神の力を持つリアムたちふたりは、今や橋をかけ我らが都へ到達した。この事態をどう納めるべきか考えよ」。占い師が答えて言った。「アティカムとアティパラムを見張りにお遣わしてください。猿どもがこっそり入ってくるやも知れません」。そしてアティカム、アティパラムはそれぞれリアチセイに乗って出て行き、休むことなくこれを駆り、都の中ををくまなく見張り続けた。

一方セダー姫は日がな一日嘆き続け、いくら嘆いても心が晴れることはなかった。そうして日も暮れるとソチアターに向かって訴えるのだった。「お姉さま、私はもう生きていません。誰よりも誉高い夫が私を連れ戻しに来て下さらないならば、私は今日限りこの命を絶ってしましましょう」。セダーをいたわるソチアターはそれを聞いて懇願した。「まあ、命を絶つなどとおっしゃらないで。姫のだんなさまはもうそこまで来ていらっし

やいますから」。ピペーク師が何事をも占うことができるように、その妻であるソチアターもすべてを見通す目を持っているのであった。

- 第30章 -

リアム王子について話そう。王子はピペークを呼び、「リアップはセダー妃をさらってどこに隠しているのだ？」と尋ねた。ピペークは石板を首からはずし、奥義に従って数を足し掛けを始め、天の三界に起きているできごとをすべて見抜いた。そしてうやうやしく申し上げた。「リアップが姫君を留めているのは庭園にしつらえた洞窟の中、ボスポックと呼ばれるたいそう大きな輿にございます」。リアム王子は嘆いた。「ああ、ピペークよ。我々はどうすればいいのだ？」。ピペークは助言した。「ハヌマーンを姫君のもとへお遣わしてください。ひとつには宝石をはめた指輪、ふたつにはさまざまのお衣装、またひとつにはお菓子や食べ物、あらゆる果物やお飲み物やお料理を取りそろえ、それらをハヌマーンに届けさせるのです」。リアム王子はピペークの言葉を聞き、白猿ハヌマーンを呼んだ。

姿を現わしたハヌマーンは王子に向かい手を合わせ深く身を伏した。リアムは命じた。「ハヌマーンよ、おまえを遣わす。リアップの庭園に置かれている、わが妃のもとへ走ってくれ」。ハヌマーンは命令を聞くなり、さっと剣を拵んで腰に差し、大切な包みを肩にしっかりとかつぐと矢のように空へと飛び出した。しばらく行くと大きな山に突き当たった。他に行く道はない。この山にはリアップが番兵として魔物を配置していた。アーカバルノーサイという名のこの魔物は、山と同じくらいの大きな身体を持ち、おまけに胸は魚で手と頭が魔物という奇怪な身体をしていた。ハヌマーンは近くまで来ると、その魔物が道を塞いでいるのに気がついた。「やい、そこのばかでかい魔物！名を名乗れ。とびついておまえの尻の穴から入ってやろうかと思ったが、食べ物ばかりの預かり物を抱えていては、そうもいかぬ。ならばこの荷物は山の向こうへ放り投げ、おれはおまえのえらを引き千切って口から中へ飛び込んでやる」。魔物は吠えた。「おう、こっちこそ白猿と知ったからには生かしてはおけぬ。その首を掻き切ってやる！」。ハヌマーンはさらに「やい、アカバルノーサイと知ったからにはそのえらを引き裂いてやる」と怒鳴り返すと、そのまま飛び上がって、放った荷物をひつつかみ、セダーの元へと一目散に駆けて行った。

一方セダーは悲しみに心を沈ませているところであった。ハヌマーンは姫の前にそっと姿を現わし、深々と頭を下げた。セダー妃はハヌマーンの姿を認めるとその美しい声を上げて驚いた。「あれまあ、風の息子ハヌマーン。まさかこうしておまえの顔を見るられるなんて。貴き私のだんな様はどれほど私のことを案じているでしょう？ねえハヌマーン？」。ハヌマーンは申し上げた。「みな息災に暮らしております。しかし奥方様のことを案じお嘆きになり、このように」と数々の土産を差し出した。そして長居はせずさっとその場を引き下がった。

空を駆けて行くと魔王トサモックのいる都を通りかかった。ハヌマーンは身につけたあ

りあまる力を抑え切れず、庭園中の木々やら果樹やらを引き抜くと、それらをみなさかさまに地面に突き立てた。トサモックの兵たちは白猿が庭園の木々を一本残らず引き抜いてしまうのを目にすると、慌ててトサモックのところへと報告に走った。トサモックは烈火のごとく怒り狂い、アンタチットを直ちにこの場へ呼びつけ矢を射らせねばならぬと考え、伝令を遣わした。伝令は大急ぎでアンタチットを呼びに走り、アンタチットは到着するなり命に従って矢を放った。矢は蛇となり猿の足元から首へと巻ついてぎりぎり締め上げた。魔物たちはわあわあと騒ぎたてて周りを取り囲み、殴るは蹴るは布切れのようにぺたんこにのしてやろうとした。しかし、リアム王子が信頼を寄せる家来のことである。風の息子は起き上がり、叩かれれば叩かれるほどその身体を大きく膨らませ、風の神の息子としての威力を現わした。「おれの命がほしいなら、この身体を縛り上げ、石鉢に入れてつぶすがいいぞ」。それで魔物どもはハヌマーンを縛り上げみなでかつぎ、石鉢へと放りこんだ。そしてこれを突きにかかったが、どうしたわけか、突くほどにその身体は鉢からあふれるほどになり、さらに突けば大木ほどにも大きくなり、膨れ上るばかりで死ぬところではない。腹を突けば果てしなく深い古井戸のように沈んでしまう。ハヌマーンは悪態をついた。「やい魔物。杵をもってきたらどうだ」。それで魔物たちは杵を持ってきて力任せに突いたのだが、ハヌマーンの身体はさらに大木も超えるほどに膨れ上がった。調子に乗ったハヌマーンはまた言う。「鉄の杵でも持ってきて、男も女も力を合わせてやったらどうだ」。魔物どもは大急ぎで鉄の杵を持ってくるとわらわらとみなたかのようにしがみつき、必死で杵をハヌマーンの腹に突き立てた。ところがハヌマーンは腹にうんと力を入れて跳ね返し、杵はよろけて倒れ、つかまっていた魔物どもは、手を折り、腰を砕き、ある者は頭を割り手足が砕け散って死んでしまった。ハヌマーンは身を起こして大声を上げた。「おれの命を取りたかったら、布を持ってきてぐるぐる巻きにして火をつけたらどうだ」。そういうなりハヌマーン神の術でもって身体を山のように、あるいは天界にいるプロム神のように大きくしてしまった。宮廷に勤める召使たちは大わらわで布をかき集めてきてハヌマーンの身体に巻きつけようとした。しかし巻きつけても巻きつけても布は足りない。大きすぎて包みことなどできないのだ。宮廷中の布をかき集め巻いてはみたがまだ足りない。両手を広げた分だけ足りないかと思って布を持ってくれば、また同じだけ足りなくなり、手のひらを広げた分が足りぬと見てその分だけ持ってくればまた同じだけ足りなくなり、ついにリアップの都には一枚の布もなくなってしまった。官女たちはすっかり布を差し出してしまったものだから、身体を覆うものもなく胸をさらけ出していた。ハヌマーンときたらその娘たちのつんと尖った乳房を盗み見て楽しんだ。

曲) 薄絹は風に煽られ肩から落ち 美しい胸はあらわとなる

ハヌマーンは目を奪われ 恋心に胸を震わす

ハヌマーンはつぶやいた。「なんだ、下々の女共の乳房ばかり。モンドーキリーの姿が見たいものだ」。それでハヌマーンは声を上げた。「しっかり巻きつきたいなら、あとはモンドーキリーの衣を持ってくるんだな」。リアップは怒り狂い、しかしモンドーキリーが身につけていた衣を引き剥がすとそれでハヌマーンを縛り上げた。ハヌマーンは他の娘たちの乳房の中にひときわ美しいモンドーキリーの胸を見つけこっそり心を踊らせた。それから、自分の身体に巻きついている布の端に油を浸し火をつけるように言ってやった。魔者どもは油をかけて火をつけた。火は炎となって魔者どもの都を照らし出した。ハヌマーンは宮廷中を走り回り、火は館から館へと燃え移って、宮廷中が火の海となってしまった。存分に火をつけまわり、さあそろそろ消そうかと思ったが、モンドーキリーの衣についた火が消えぬ。不思議な力を持つモンドーキリーの衣についた火は、ハヌマーンの尻尾を激しく焦がし始めた。熱い尻尾を海の水に浸すと、チュラーム、モコーなどの魚たちは熱さに死んでしまった。さて、このとき森の中から仙人がひとり姿を現わした。ハヌマーンは尋ねた。「ああ、おじいさん。どこかに井戸はありませんか」。仙人はだまってハヌマーンの口を指差した。そこでハヌマーンが尻尾を口にくわえると火はすっと消えたのだった。ハヌマーンは言った。「おじいさんは賢いなあ。おれはおじいさんにくっついて神術を習うことにするよ」。

そうして身体を子猿ほどに小さく変え、仙人の後にしたがって庵へとついていった。庵の中におとなしく座りっていたが、こそこそと呪文を唱えて身体をだんだんに大きくしていった。その身は庵がいっぱいになるほどになり、ついに庵はぱっかりと割れてしまった。ハヌマーンはごねた。「おじいさん、腹が減ったよ」。「そうかい、子猿や、腹が減ったのかい。それでは、握り飯をやるから口をお開け」。仙人は呪文を唱えて握り飯を作り出すと、ハヌマーンの口に放りこんでやった。ひとつ放りこむと、またひとつ握り飯が現われる。ハヌマーンはもう腹がはちきれそうで、それ以上は食えなくなった。「どうした、口をお開け。もうひとつ握り飯をやろう」。ハヌマーンは降参した。「もう腹がいっぱいで、食えません。でも、喉がかわいてしまいました」。そこで仙人は近くの溜め池を指差した。ハヌマーン溜め池のところへ行くと、くいくいと水を飲み、すっかり干上がるまでに飲み干してしまった。仙人はひどく腹を立て、黒い杖を手にとるとパーリ語の呪文を吹き込み、さっと投げ上げた。杖はヒルとなってハヌマーンの口元に噛みついた。ヒルに噛まれて口からは血がたらたらと流れ出る。ハヌマーンが慌てて引き剥がそうとすれば、ヒルは手に食いついて離れない。足で引き剥がそうとすると足に噛みついて金輪際離れない。そのうちヒルはハヌマーンの身体全体にぎゅうと張り付いてどうにもはがれなくなってしまう。白猿はどうとう泣き出した。「おじいさん、どうか助けてくださいよう」。仙人がいとも簡単にヒルを剥がすと、それはもとの杖に戻り仙人の手に戻った。ハヌマーンは恐れをなし、手を合わせて仙人の前に身を伏した。「これからは心を入れ替えて、無茶ないたずらはいたしません。おじいさんのいるところでは力試しなどいたしません」と誓い

を立てた。そして仙人の下を辞し、リアム王子の待つ都へと帰った。リアムの前へ進み出ると、セダーに会い無事に土産物を捧げてきたこと、セダーが愛しいリアムを思って嘆いていたことなどを報告した。リアムは、ハヌマーンがセダーの居所を突き止めて来たことに満足した。ハヌマーンは報告を続けた。「リアップの都を通りましたときに花や木々の植わった庭園をめちゃくちゃにしてやりました。アンタチットが矢を射ってきたので捕まってしまう、布を巻かれ火を放たれましたが、私はそのまま暴れまわって都中に火をつけ、魔物たちをさんざんに困らせてやりました」。さらに言い足して、「魔物どもは私を石鉢に入れ、鉄の杵でつぶそうとしたのですが、私が杵を跳ね返してやったのでいくらかは死に、いくらかは頭を割るなどしてしまいました」。リアムは驚いてこれを戒めた。「遣いとしておまえをやったのによその都に火を放つなどして、セダーの身に災いが及んだらどうするのだ。以後、決して行きすぎたことをしてはならぬ」。

- 第31章 -

それから3日が過ぎたころ、リアム王子はオンコットを呼びつけた。お呼びがかかったと知るとオンコットは直ちに現われ、王子の前にひれ伏した。リアムは言った。「オンコットよ。おまえにセダー妃のところへ行ってもらいたい」。王子は家来に命じ、菓子や果物、さまざまな絹の衣と指輪を用意させ、オンコットがかつげるよう大きな包みに作らせた。オンコットは剣を握り腰に差し身支度を整えると、その大切な預かり物を背負い、矢のように空へ飛び出していった。そして日も傾くころにセダーのいる庭園へたどり着いた。

オンコットはセダーの前に深く身体を折って敬意を表し、指輪とさまざまな衣、それに果物やらお菓子やらの届けものを差し出した。セダーは尋ねた。「白猿さん、名は何というの？」オンコットは身体を折ったまま答えた。「私はオンコットと申します。リアム王子さまに仕えるものでございます」。そうとだけ告げると、美しい妃の前から身を翻し飛び出した。

飛び立つとそのまま魔王リアップの都へ入り込み、オンコットはリアップの座る玉座まで進み行った。リアップはオンコットを見かけて呼び止めた。「やあ、オンコットではないか。おまえはモンドーキリーの息子、わしはおまえの父、継父ってわけだ。おおい、女ども！ありとあらゆる食べ物をもってこい！金の卓に並べ、このオンコットに食わしてやれ！」。オンコットはあぐらをかいて座り、食べ物を腹一杯につめこんだ。そうするうち

に眺めやると、リアップが宝石をちりばめた襟飾りや金のたすきで身を飾っているのに気がついた。オンコットはやにわに飛び上がるとリアップの頭上に輝く王冠をむしり取った。リアップは玉の棍棒を引き寄せたがオンコットはそれをも足蹴にした。リアップはオンコットの蹴りをまともに受けると、身体を震わせ気を失ってしまった。宮廷の女たちは泣き叫び、リアップのもとに駆け寄りその胸をどんと叩いてやったりした。まもなくリアップは息を吹き返した。「この恩知らずのくそつたれ！飯をふるまわれておきながら、あるじを蹴り倒し命をとろうとするか。このような輩は生かしてはおけぬ。殺してくれるわ」。そう言うと弟のペアカネーへを呼んだ。「あのふとどき者を追い、息の根を止めてしまえ。生かしておくな」。命を受けたペアカネーへは、直ちに輝く棍棒を手にして矢のごとく飛び立った。嵐のような勢いで空を駆けるので、ごうごうと風の音が鳴り響いた。その音にオンコットは振り向き、魔物の一族郎党が追ってくるのに気がついた。「おお、この私を殺そうというわけか。おもしろいじゃないか。ひとつ、とっつかまえてこらしめてやる」。オンコットは勢いつけて向きを変え魔物に向かい突進した。ペアカネーへは棍棒を振り回した。オンコットはさっと身をかわすと、ペアカネーへの首根っこを抑えつけ、剣を抜いてその首を払い落とし、海の中へと放り込んでしまった。

このとき見張りのアティカムとアティパラムは、叔父のペアカネーへが白猿に破れ、首を落とされ海へと投げ捨てられる一部始終を見てしまった。ふたりは大急ぎでリアチセイを走らせランカーの都へ駆け戻った。そしておそろおそろリアップの前へと進み出た。「やあ、アティカムにアティパラム。今日わしの前に現れたとは、いったい何ごとか」。アティカムとアティパラムは申し上げた。「たった今、叔父上のペアカネーへ様がお亡くなりになりました」。それを聞くと魔王リアップは激しく胸を叩いて吠えた。「ああ弟よ！いつか天の十六界に攻め入ったときは神々どもがみなおののき恐れ入ったものなのに。それが今、たった一匹の白猿にやられるとは！」それだけ叫び、激しく泣いた。

一方オンコットは一目散にリアムのもとへと戻り、この偉大にして高貴な王子の前にそろそろと進み出てひれ伏した。そして、さまざまの食べ物と指輪などをセダー妃に捧げたこと、さらに魔物の都に入りこみ、金銀で身を飾ったリアップの王冠を払い落としたこと、リアップが棍棒を振り回してきたのでこれを足蹴にしたらリアップが仰向けにひっくりかえったことを報告した。さらに、ペアカネーへが追いかけてきたので、容赦なく剣で首をはらい海へ投げ込んできたことを告げた。リアムは言った。「オンコットよ。私はおまえを遣いに出したのだ。それが、やつを蹴ったり、やつの家来まで殺してくるとは何ごとだ。ハヌマーンにオンコット。これがもととなりセダーの身にもしものことが及んだら、おまえたちの命もないと思え」。

- 第32章 -

(この章はスパイク・トムの第2夜「ポンニャカーイ、セダーの亡骸に化ける」の部分で

す)

トサモックは12人の強兵たちを呼び集めた。アソ・トライモック、アソ・トライカーイ、モハー・カーイヤクサー、占い師。クンピカー、それに息子のアンタチットらである。みなが集まったところで話し出した。「どういうわけで人間どもは橋をかけて我が国に攻め込み、我らの兵を殺して行くのだ？さては、あのセダー姫にことを発しているのに違いない」。トサモックは皆の顔を見渡した。「誰か、セダー姫の姿に身を変えられるものはおらぬか」。家来たちの答えはひとつであった。「ポンニヤカーイをおいては他にありません」。

あのピペーク師がリアムとレアック率いる人間たちの側に逃げ出して以来、トサモックは師の子どもであるポンニヤカーイと、チャウ・ソカチャーを牢屋に放り込んでおいたのだった。トサモックは兵を牢の番兵のところへ送り、ただちにポンニヤカーイを牢から出しこの場へ連れて来るよう命じた。番兵たちはことの次第を知ると即座にポンニヤカーイのを牢から出した。外へ出されたポンニヤカーイは水を浴び、身を清めた。芳しい香水を身体につけ、装身具で身を飾り、衣装をまとった。すっかり身支度が整うとトサモックの館へと向かった。トサモックの前へ出ると、両手を合わせて深くお辞儀をし、ポンニヤカーイは尋ねた。「私をお呼びとは、何のご用でございましょう」。

魔王トサモックは優しく答えた。「なあ、わしの姪っこよ。おまえを呼んだのにはわけがある。おまえは、セダー姫に化けることができるかどうか否か」。ポンニヤカーイは慎んで答えた。「もちろんできますとも。7日間、セダー様にお仕えさせていただきますならば」。トサモックは満足して答えた。「よし。では、装身具で身を飾って行け。そして庭園に掘られた洞穴の館にいるセダー姫の世話にかかるのだ」。ポンニヤカーイはトサモックの言いつけを聞き終えると、深くお辞儀をしてその場を去った。最も芳しい香水を取り出したんねんに身体に擦り込んだ。そして空へ舞い上がり、セダーのいる洞窟へと飛んで行った。

セダーの館へ着いたポンニヤカーイは、姫と、姫の世話をする自分の母親の前にひれ伏した。母のソチアターはこうして娘が謁を賜りに顔を見せたことに驚いた。「まあ、ポンニヤカーイ、かわいい私の娘よ。何ごとがあつて、おまえは母に会いに来たのだね？」。ポンニヤカーイは言った。「セダー姫に7日間お仕えするよう、魔王に言いつかって参りました」。

そしてセダーに一生懸命仕えながら、ポンニヤカーイは姫の姿を隅々まで観察した。姿も、月のように丸いお顔も整って、まったく、セダー姫は天女のように美しかった。ポンニヤカーイはその姿をしっかりと目に焼きつけ、7日間がたつと母と姫にいとまを告げ庭園を去った。そうして途中、呪文を唱えセダーの姿に身を変えて飛んで帰った。トサモックはセダーに化けたポンニヤカーイの姿を見つけると、飛び出して行ってぎゅうとその身

体を抱きしめた。ポンニヤカーイはトサモックを押しとどめ、「私はセダー姫ではございません。ポンニヤカーイです」。トサモックは身を引き玉座に戻り、言葉を発した。「おお、ポンニヤカーイ。おまえに水に溺れたセダーの亡骸となって流れて行くことを命じよう。ケーカーケーカーと鳴いて内臓をついばむカラスも共にな」。ポンニヤカーイは自分に課せられた役目を飲みこむと、さっと空に駆け出した。海辺近くに着くと呪文を唱え、セダーの亡骸に身を変えた。2羽のカラスに臍をつつかせながら水の流れに身を漂わせていった。リアムの陣地まで流れてゆき、王子が香水を身体に塗るあずまやに行きあたった。太陽がやや傾き始め、夕暮れになりかけようという頃である。ちょうどその頃、リアムはハヌマーンやチュンプーピアン、オンコット、ニルアエクにニルカン、ニルペイツといった猿の将官たちと弟のレアック、それに大勢の猿兵を連れ、水遊びに来たところであった。王子は水辺に浮かぶ白い蓮の花、色とりどりの睡蓮、小さな黄色の花をつける水草がゆらゆらと水面を飾るのを見ていた。朝の日に輝く花々を見ていると愛らしいセダーが恋しくてならなかった。「ああ、愛しおまえ。もしおまえがここにいたら、きっと花の名前を私に聞き、私は教えてやるのだろうに」。嘆くほどに、涙はとめどなくあふれてくる。「ああ、美しい姫、愛しい妻よ。苦しみに囚われて私は、心休まる時もない」。

王子が辺りに視線をやると、亡骸のような姫の姿が水面を流れてくるのが目に止まった。そばへ寄り、しかと見れば、それはまぎれもなく、あの完璧なまでに美しいセダーなのであった。「ああ、おまえはとうとう死んでしまったのか」。そう叫んでセダーを抱え水から引き揚げたが、嘆きのあまりセダーを抱き締めたままその場に気を失ってしまった。

そこへレアックが現れ、セダーの亡骸を抱えて倒れている兄王子を発見した。レアックは、「セダー姫！姉様！本当に亡くなってしまったのですか。お仕えすべき姉様を失っては私も死ぬよりほかありません」。そうして兄夫婦ふたりを抱きかかえ、そのまま折り重なるように弟もまた気を失った。

ハヌマーンについて話そう。ふたりの王子が倒れているのに気づいたハヌマーンは大声を上げた。「おい、オンコット！一大事だ！」。集まって来た猿の兵たちは、息もしないふたりの王子と、王子に抱えられるセダー姫の亡骸を見て口々に、災難だ災難だとささやきあった。王子たちはしかし、ただ静かに目を閉じたままだった。

< 葬曲 >

夕暮れも近づき、涼やかなるとき。気を失い地に伏す王子。風の神が雲を流し、花の香を漂わす。芳しき花の香よ。そのあまりにも甘い香に、王子はようやく目を覚ます。

王子は言った。「こうなったのもそもそもはおまえらのせい。ハヌマーン、おまえは他人の都を焼き払ったりしただろう。オンコット、おまえはよその家来を殺めたらう。そのようなことをするから、やつが怒って私の大切なセダーを殺したのだ。いいか、ふたりと

も。おまえらも生かしてはおけぬ。今日のうちも死刑に処すからそう思え。無茶をするなとよくよく命じておいたのに聞かぬから、こういうことになるのだ」。リアムは家来を呼び、ハヌマーンとオンコットを縛り上げるよう命じた。ふたりは手を合わせて懇願した。「ご主人様。私どもを縛り上げて処刑するのはしばしお待ちください。どうか考える間をくださいませ。リアップのやつに、敢えてセダー様を殺すことなどできぬはず。私への処罰はどうか後日に」。ハヌマーンとオンコットは、生かされるにせよ処刑されるにせよ、ともかく亡骸を火に葬らせてくれと頼んだ。リアムは、「ならばハヌマーン、今はおまえらの願い通りにやらせてやろう」と言ってやった。。ハヌマーンはその言葉を聞くとさっそく兵たちに指図し、8つの方角すべてを兵で固め、なにが出てきても必ず捕えるよう、よくよく気をつけて見張るよう言いつけた。それからオンコットを呼んで地下もぐらせ、バダールの国を見張らせた。チュンブーピアンにはあたりの警護をまかせた。そして、ニルアエク、ニルペイツ、ニルカンにセダーの亡骸を火にくべさせた。ハヌマーン自身は地上に輝く網を張り、しっぽを空に向かって突き刺すと、風のひとすじもよそへ漏れ出ないようにした。そして空へ飛び上がり待ち構えた。ニルアエク、ニルペイツ、ニルカンは火を起こし、ごうごうと燃え盛ったところに亡骸を放り込んだ。

セダーの亡骸のふりをしていたポンニャカーイだが、亡骸として火にくべられては熱さに耐え切れず煙にまぎれ急いで空へと舞い上がった。が、そこにはちょうどハヌマーンが待ち構えていた。風の神の息子ハヌマーンは大喜びでぱっと飛び出し、この美しい娘を捕えた。「ああ、実にきれいな娘じゃあないか。おまえさん、どこの娘だね？」ポンニャカーイは告白した。「私は、ピペーク師の娘です」。「まったくおまえは、天上の16界に住む天女のように美しいね。名前は何というのだね？」「はい、名はポンニャカーイと申します」。「どうも私はおまえに惚れしてしまったようだよ。ぜひ親しくなりたいものだ。そうだ、おまえを私の正妻にしよう」。ハヌマーンはポンニャカーイを抱き寄せ、くちづけを浴びせた。かわいい娘だねえ、私はおまえに惚れてしまったようだよ。

- 第32章(つづき) -

(この章はスバエク・トム第2夜「ポンニャカーイ、セダーの亡骸に化ける」の部分です)

ハヌマーンはポンニャカーイを捕らえると、こう言い聞かせた。「罪人は捕らえられたら縛り上げると決まっている。だから私はおまえの背中を打たねばならないけれども、叫ぶんじゃないよ。ほんとうには当たらない、打つ真似をするだけだからね」。そしてポンニャカーイを腰にかかえ、空を飛びリアムのいる陣地へ向かった。陣地へ着くとハヌマーンはポンニャカーイを下ろし、ささやいた。「さあ、歩きながら叫ぶんだ。『後生ですから、ぶたないでください』ってね。大丈夫。ひどく叩いたりはしないから。王子の前では

ありのままを報告すればそれでいい・・・ところで、いったい誰に命じられてこんな策略しかけたのだ？」ポンニャカーイは答えた。「憎き魔王リアップが、セダーの亡骸に化けるよう私に命じたのです」。

ふたりは王子のもとに着いた。ハヌマーンはしずしずと進み出て、ポンニャカーイを差しだした。「亡骸はセダー様ではなく、魔物の娘が化けたものでございました」。リアムはそれを聞くと娘に向かい、尋ねた。「娘、名前は何という？」。娘は王子の前にひれ伏した。「はい、私はポンニャカーイと申します。10の顔をもつ魔王に、セダー姫の亡骸に化けることを命じられたのでございます」。リアムは続けて問うた。「おまえはどこの家の娘なのだ？」「私はピペーク師の子でございます」。リアムは驚いた。「やあ、皆の者。誰もこの娘に指一本触れてはならぬ。手出しをしてはピペーク師の気を損ねるであろう」。そして本当に娘であるか否かを確かめるため、遣いの者をやりピペーク師を呼んだ。遣いはピペーク師のもとへ走り、恭しくお辞儀をしたあと、すぐに王子のところへご足労くださいますようにと伝えた。遣いの言葉を聞いたピペークは、王子を待たせぬよう急いで館へ向かった。リアムの前に身を伏せようとして、娘ポンニャカーイの姿が目に入った。ピペークは激しく涙した。「ああ、私のかわいい娘。こんなところへ来るとは何ごとか」。この様子を見てリアムは尋ねた。「ピペーク師よ。この娘は本当におまえの娘なのかね？」。ピペーク師は答えた。「ああ、王子。まことに私の娘でございます。セダー姫の亡骸に姿を変えたのも、あのリアップの策略によるものです」。

リアムはハヌマーンに、ポンニャカーイを国へ送り届けることを命じた。王子は「ポンニャカーイよ、おまえの国はどこだね？」と尋ね、「私の国の名はプレア・チュレイ・サハ・コックライ・ランカーと申します」という答えを確かめると、ハヌマーンに告げた。「では、ハヌマーン。プレア・チュレイ・サハ・コックライ・ランカーへ娘を送って行け」。願ったり叶ったりの命令に、ハヌマーンは心を躍らせた。そして、装身具で身なりを整え、刀を手にとり腰に差し、ポンニャカーイを抱きかかえると空へ飛び出した。上空へ上がるなり、ポンニャカーイの顔中に口づけし、「ああ、かわいい娘。おまえを離したりするものか。愛しくてたまらない。これからおまえを国まで送り届けるから、安心しておいで」とささやいた。

< 曲 >

胸の思いを遂げたハヌマーンは、ポンニャカーイを送り遠い国へと向かう。

乙女を腰に抱き空を駆け続け、しかし分かれ道へ着けば、お互いの運を祈るばかり。

どうか私をお見捨てになりませぬようにと、ポンニャカーイはすがり、この身が果ててもおまえを捨てたりはしないと、ハヌマーンは返す。

ハヌマーンは、乙女の背中をやさしく撫でた。「おまえにもわかるだろうね。私も主人には逆らえぬ身。いくら恋仲のおまえでも、国の中までは送って行ゆけない。さあ、ここでお別れだ」。ポンニャカーイも聞き分けよく、ハヌマーンの前に身を伏し別れの挨拶をした。しかし、名残り惜しく別れ難い。ハヌマーンは背を向けて7歩進んだが踵を返し、愛しい妻をまた抱きしめた。「ああ、だめだ。とても思い切れない。かわいい私の乙女」。ポンニャカーイはこらえて言った。「ああ、尊いだんなさま。どうぞお戻りなさいませ。私もここからは、自分で飛んで帰りましょう。プレア・チュレイ・サハコックライ、プレア・チュレイ・ランカーへ」。そしてポンニャカーイは空へ上がり、振り返り振り返り飛んで行った。ハヌマーンも続いて空へ上がり、お互いにまた振り返り振り返り帰って行った。なんとも悲しく哀れな別れであった。

ハヌマーンは陣地へ戻り、リアム王子に拝謁した。リアムは問うた。「娘をどこまで送って行ったのだね？」ハヌマーンは答えた。「国の境まででございます」。リアムはそれを聞き満足した。

- 第33章(つづき) -

ポンニャカーイがその後どうなったかを話そう。空を飛んで帰った彼女は、サハコックライ・プレア・チュレイ・ランカーの国にたどり着くと、金銀の装身具で身を飾りかぐわしい香水をたんねんに身体につけ直すと、魔王リアップの館へ向かい歩き出した。そして、リアップの前へ出ると両手を合わせ報告した。「私は、言いつけを成し遂げることができませんでした。あの人たちは私の亡骸を火にくべたのです。煙にまぎれて空へ逃げようとしたのですが捕まりました。そしてこのように国に送り返されてしまいました」。

リアップはその報告を聞き、大いに機嫌を悪くした。即座に家来をひとり呼びつけると、ムール・プレア・ロアムを呼んでこいと怒鳴った。家来は矢のように飛んで行って、ムール・プレア・ロアムを連れて来た。ムール・プレア・ロアムが現れるとリアップは言った。「なあ、弟よ。今こそ我々は兵を上げ、人間どもを叩きのめさねばならないぞ」。ムール・プレア・ロアムは黙って両手を合わせその場を辞した。そして家来のひとりに命じ、国中の兵に聞こえるよう、大きく召集の太鼓を鳴らさせた。太鼓の音を聞いた兵たちは、慌てふためき駆けずり回り、鋭い武器をひつつかみ、あるものは速足のリアチセイにまたがり、あるものは大鹿やサイや水牛を駆り、その他大勢は駱駝や驢馬に乗って集まった。

一方戦場では、この7日間というもの轟音が鳴り響き地面は揺れに揺れていた。リアムは心中穏やかでいられず、ついにピペーク師を呼んだ。ピペーク師が到着し挨拶を済ませるとさっそくりアムは尋ねた。「ピペーク師よ、どういうわけで戦場はこのように揺れているのだろう？7日間というものひどい地響きが続いていて、どうも嫌な感じがする」。ピペーク師は首にかけていた石板をはずし、数字を書きつけた。そうすると世の中に起こっているすべての事柄は、この占い師の心の中にはっきりと映って見えてしまうのだった。ピペーク師はリアムに告げた。「ムール・プレア・ロアムという魔物がおります。この魔物は

並外れて大きな図体をもち、戦いにおいては神術を操り、怖れというものを知りません。天界の数多の神々でさえその力を怖れるほどです。その魔物が12サモットほど大勢の兵を率い、我らの陣へ攻め込もうと恐ろしい勢いで迫っております。リアムはいっそう不安になった。「それでは誰を戦いに出したらよいだろう?」。ピペーク師は自信をもって答えた。「他でもありません、皆の上に立つお方。魔物を抑えつけることができるのはあなた様よりないのですよ」。

翌日から、戦場は雷鳴のとどろくような音に満たされた。王子は軍を整え、勇敢な弟のレアック、白猿のハヌマーン、ニルアエク、ニルペイツにニルカン、それに80アカオの猿兵を率い、士気を高める雄叫びを上げ、太鼓やほら貝の音を響かせた。王子は高貴な猿王のソクリープの背に座り、空へ上がって山を捧げ持ち、魔物に向かい投げつけるばかりに身構えた。神の御者であるブレア・ミアトライは、レアックを乗せ駿足の馬を繋いだ馬車を御していた。

ムール・ブレア・ロアムたちは兵を挙げ、地響き立てて前進していた。海も地面も揺れに揺れた。軍勢は層をなして進んでいた。地を歩くものと空を駆けるものがいた。太陽は陰り、光はすっかり遮られていた。天界さえもぐらぐらと揺らぎ、海は泡立ち白いトラエンの花が散るように波が砕けていた。地上は舞い上がる土埃でいっぱいになり、陣に張られたテントもひっくり返った。

リアム王子はしかし、魔物たちを怖れなかった。ハヌマーンが集めた兵は12サコーもいて、いづれも強靱な筋肉をもち、剣に切られようとも傷もつかなければ死ぬこともないのだった。強者たちは突き進み、ついに魔物の軍と対峙した。戦いは始まった。両軍は入り乱れ、そこら中でつかみ合い切り合いが起こった。猿の兵たちは次々と魔物を打ち負かし、猛るリアムはルティチャンの矢(月光の威力をもつ矢)を放った。12サモットもいた狂暴な魔物たちは死に絶えた。ところが息つく暇もなく、再びどこからか12サモットの大軍が押し寄せてきた。7日7晩、戦いは続いた。ムール・ブレア・ロアムが矢を放つと、それはリアムの身体を避けて通り天界へ抜けていった。次の一本を放つとそれはインドラ神の国へと飛んでいった。どうしても矢はリアムに触れようとしなかった。それでもムール・ブレア・ロアムは次から次へと矢を放った。退治しても退治しても、おそろしい魔物たちは何度でも12サモットづつ湧いてきた。次の7日が過ぎると、落とされた魔物の首と獣たちの首が積み上がり、海が陸になるほどだった。インドラ神は金の玉座に座り、この戦いを眺めていた。

歩兵、騎馬隊、海から攻めるもの、空から攻めるもの。猛り狂う4つの軍は猿軍を叩きつぶそうと大挙して押し寄せたが、鎧の身体をもった猿の兵たちはこれらをすっかり打ちのめした。ところが絶滅したかと思うとまた、地を埋め尽くすほどに魔物は現れる。リアムは訝しみピペーク師を呼んだ。「ああ、頼れるピペーク師よ。この多勢の魔物どもはいったいどこから現れるのだ?12サモット倒しても、また12サモット湧いてくる。消えては生まれ、消えては生まれ、いったいどういう訳なのだ?」。ピペーク師は石板を取り出し

数字を書きつけ、熟慮したのちに答えを述べた。「申し上げます。この大勢の魔物たちは、モンドーキリーによって炊き出されているのです。その大鍋、尺は500ヨーイもあり、一度炊くごとに12サモットの兵を生み出すのです」。リアム王子は頭を抱えた。「その兵を炊き出す奥義書を奪ってしまわねばならないのか。そのためには誰を送りこんだらよいだろう?」。ピペーク師は答えた。「それができるのはハヌマーンしかおりません」。

- 第34章 -

(ハヌマーンは魔王に化け、首尾よく魔王の妻モンドーキリーから戦いのための奥義書をだまし取った。

モンドーキリーが騙されたと気づいた時、ハヌマーンはすでにリアム王子のもとへ戻ってしまった。)

さて、本物のリアップはどうしていたか。12サモットの猛々しい兵を次々と戦場へ送り込んでいたのだが、それもリアム王子の放つ矢にみな退治されてしまい、辺りはしんと静まり返った。リアップは不審に思い、弟を呼んで聞いてみた。「なあ、弟よ。これはどうも変ではないか。ノリエイ神が降りてきて敵方に荷担しているのではあるまいか。人間どもの軍だけでこれほど強いわけではない。ノリエイ神がその神力を使っていると思われるのだが」。そう言うと、弟のムール・プレア・ロアムにこっそり様子をうかがってくるよう命じた。

その頃ノリエイ神の化身であるリアム王子は、戦いを終え眠っていた。弟のレアックも占い師のピペークも、白猿のハヌマーン、ニルペイ、ニルアエクもみな眠っていた。ムール・プレア・ロアムがそっとそばへ近づくと、ぐっすりと眠っているリアム王子の足の裏に輪宝が浮かび上がっているのが見えた。ムール・プレア・ロアムは、猿の兵士たちに気づかれぬようそろそろ引き下がり、飛んで帰ってリアップに報告した。「兄さん、おかしなことですが、リアム王子の足の裏にはノリエイ神の輪宝が浮かんでいるのです」。それを聞いてリアップは「弟よ、早まるな。わしはこれからカイラーサ山へ行き、ノリエイ神がいるか確かめてくこよう」と言った。

このときノリエイ神は神術によって、4つの顔と8本の手をもつ御身を創りそこに鎮座していた。リアップはその姿を認めると安心して引き返した。「弟よ、わしらの勘違いだ。わしは今しがた、この目でノリエイ神がカイラーサ山にお座りになっているのを見てきたからな。とすれば向こうで眠っているリアムはただの人間にしか過ぎぬ。なにも怖れる必要はない」。そうしてリアップはムール・プレア・ロアムを連れ、ふたりして空を駆けランカーの都へ戻った。身体を休めようと館へ入って行くと、兵たちがみな一堂に会していた。そこへ妻のモンドーキリーが現れ、うつむいたまま先日の出来事を告白した。「あな

たがお帰りになったものと思い込んで気を許し、奥義書を渡してしまいました。まさか白猿が私を欺いて奥義書を持ち去るなんて思いもしなかったのです」と言い訳した。

